# 東京経済大学
# アダム・スミス生誕300年記念

## 講演会 記録集

2023年９月30日㈯

会場：東京経済大学
大倉喜八郎 進一層館 Forward Hall

Royal Academy of Artsのアダム・スミス像

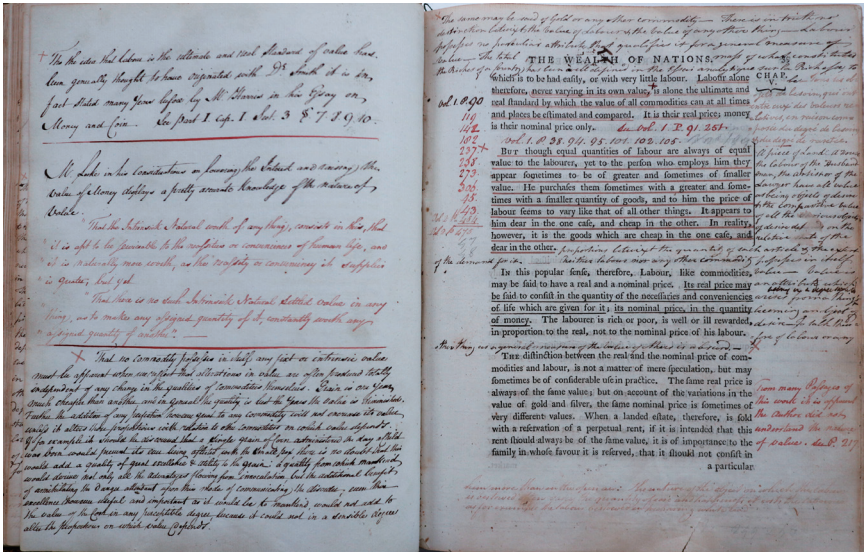
講演会場入口

講演会場

講演会

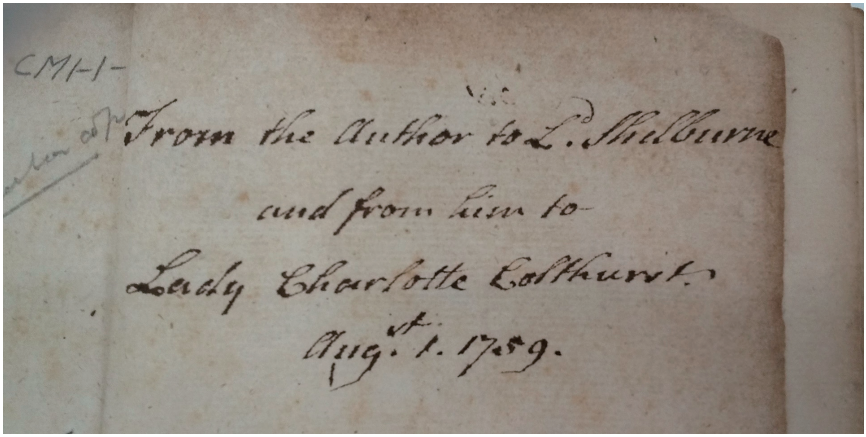
アダム・スミス
生誕300年記念
講演会・展示会
2023年
9/30
開演13:00-16:00
アダム・スミス
生誕300年記念展示会

展示会場


THE WEALTH OF NATIONS,
CHAP.

『国富論』

『国富論』の最初の日本語完訳




『道徳感情論』献辞

# 目　　次

開会挨拶…… 岡本　英男 … 1

アダム・スミスの大きな政府論

　―金融規制・公教育・累進税―…… 新村　　聡 … 4

スミスを継いだマルサスとリカードウから受け継ぐもの

…… 出雲　雅志 … 20

アダム・スミスとローダデール

　―ローダデール伯文庫所蔵の『国富論』初版本をモチーフとして―

…… 安川　隆司 … 36

# 開会挨拶

岡本　英男
（東京経済大学学長）

皆さん、学長の岡本です。本日、アダム・スミス生誕300年記念としまして、本学図書館の主催で３本の講演がございます。１つめは新村聡先生の「アダム・スミスの大きな政府論―金融規制・公教育・累進税―」、そして２つめが出雲雅志先生の「スミスを継いだマルサスとリカードウから受け継ぐもの」、最後の講演は安川隆司先生の「アダム・スミスとローダデール」というテーマで、アダム・スミス関連のそれぞれの分野の第一人者の先生方が講演してくださることになっております。

実は、私も研究者としての最初の出発点は、古典派経済学の研究でした。東北大で財政学を本格的に勉強するにあたって「古典派の財政学から勉強すべきだ」と言われまして、修士論文も「リカードと公債問題」というテーマで書きました。このように、アダム・スミス、リカードとはまったく縁がない世界ではなかったのですが、時が経つにつれて現実の問題に非常に関心が強くなり、大学院を出て助手のあたりからアメリカ財政に興味を持ちました。そして、その中から福祉国家財政に興味が移り、自分の出発点だったアダム・スミス、そしてリカードをじっくりと読む時間や機会が持てませんでした。

ここで皆さんに紹介する『アダム・スミス　共感の経済学』という本の著者は、ジェシー・ノーマンというイギリスの現役の保守党の国会議員で、修士・博士号も持っていて、ある意味で幅広い知識人と言っていい方だと思います。１回目は昨年の夏休みにざっと読み、その時はさほど感動しなかったのですが、一昨日、昨日あたりから時間を見つけて重要な部分を再読しました。そうすると、すごく響くんですね。本というのは１回だけではなく、２回、できれば３回と読むべきものだと、改めて思いました。この本の良いところは、スミスの生涯を少年時代から、そして『道徳感情論』を書いた頃、そして『国富論』執筆の頃、たとえばエドマンド・バークがアダム・スミス宛ての手紙で『国富論』についての感想を書いているところなどが丁寧に紹介されているところです。そういう私が今まで充分知り得なかったことも書かれているのですが、やはり

最大の魅力は、「現代経済学あるいは現代経済を経験した中でアダム・スミスから何を学ぶべきか」という問題意識を非常に明確に、しかもそれについて本格的に考察し叙述しているところです。ごく簡単に紹介しますと、「アダム・スミスというのは、単なる、いわゆる狭い意味での経済学者ではなかった」「スミスから、今の時代に合った新しい経済学を提示することが最も必要だ」ということで、こういうことを言っています。

> 「そのためには現代の経済学のルーツに立ち戻り、アダム・スミスその人に立ち返る必要がある。自由至上主義者として讃美者から崇められ批判者から謗られるステレオタイプ化されたスミスに、ではなく、倫理学から法学、政治経済学にいたるまで幅広く深く考えた思索の人としてのスミスに。」
>
> 「実際のスミスは利他主義の『道徳感情論』から利己主義の『国富論』へパチッとスイッチを切り替えた知的変節者ではない。彼は市場原理主義者ではないし、リバタリアン（自由至上主義者）でもなく、レッセフェール論者（自由放任論者）でもない。利己心の讃美者でも、金持ちの崇拝者でもないし、女嫌いでもない。ホモ・エコノミカスとも略奪的資本主義とも無縁だ。重商主義も奴隷貿易も厳しく批判した。スミスの真の姿は、驚くほど間口と奥行きの深い思想家である。」

「現代の経済学を新しく提示するために、スミスの時代に立ち戻って、政治経済学に帰るべきだ」というのが、このジェシー・ノーマンの主張なのですが、そのために少し長くなるかもしれませんがその骨格部分を簡単に紹介しますと、ポイントは６つの点です。「スミスから現代の我々は何を学ぶべきか」として６つの点を挙げています。第１点は「資本主義と商業社会は分けて考えるべきだ」ということです。第２は「商業社会には国家が必要だ」ということ。これは、新村先生のテーマでもあります。第３は繁栄する商業社会には強い国家がついているということ。「市場であれ政府であれシステム全体は信頼に依拠しているのだが、そのためにまず必要なのは法に基づく正統性である。」ということを彼は明確に言っております。第４のあたりから2008年のリーマンショック以降の金融危機がアメリカ、イギリス社会に深く傷を与えてしまったこと、

そしてその反省の色が濃く浮かぶのですが、第４は「商業社会にはすでに述べた脆弱性のほかに、本質的な弱点がある」ということ。第５は「現代の商業社会が直面する難題は縁故資本主義だけではない」ということ。大きな問題として公共の領域がどんどん商業化していることがありますが、これは私の現在の問題意識と非常に重なります。最後の第６は、「商業社会はつねに変化し、絶えず新たな課題に直面する」ということ。今の格差社会であるとか、AI等の技術の台頭についても述べています。

こういうかたちで、我々はアダム・スミスからまだまだたくさん学ぶべきことがあると私は確信しています。しばらく私は『国富論』『道徳感情論』から離れていましたが、いつか時間を見つけてじっくり読んで、現代の我々が直面する難題に対するヒントを得たいと思っているところです。皆さんもぜひ、３名の先生方の講演から何か学んで本会場を後にしていただければと思います。以上、私からの開会の挨拶としたいと思います。ご清聴有難うございました。

# アダム・スミスの大きな政府論

## ―金融規制・公教育・累進税―

新村　聡
（岡山大学特命教授・名誉教授）

## 1　はじめに

本日は、「アダム・スミスの大きな政府論」というテーマでお話をさせていただきます。

皆さまは、アダム・スミスという名前を聞いて、どのようなイメージを思い浮かべられるでしょうか。一般の教科書では、スミスは、自由放任、小さな政府、市場主義などの言葉で語られることが多いと思います。しかし実際に『国富論』を手に取って読むと、一般的イメージのスミスとは異なる話がたくさん出てきます。とくにスミスが政府の積極的役割に言及している箇所がかなりあります。

厳密に申しますと、『国富論』には、自由放任と政府介入、あるいは小さな政府と大きな政府の二側面が共存しています。ではなぜ『国富論』には、こうした二側面が共存しているのでしょうか。この謎を解くことが、本日の講演の中心テーマです。

この謎を解く手がかりは、スミスの生涯にあります。スミスは若いころは、自由放任至上主義でした。ですから、現在一般に普及している自由放任の思想家スミスというイメージは、若いころのスミスによく当てはまります。実際、若いころのスミスは、政府の役割に消極的でした。しかし成熟したスミス、つまり『国富論』を執筆するころのスミスは、自由放任だけでなく政府の積極的役割を認めるようになります。スミスは、40歳代ごろにさまざまな経験を積む中で政府についての考え方を進化させていくのです。

ここでスミスの生涯について簡単にご紹介します。スミスは、1723年にスコットランドに生まれました。今年2023年は生誕300年に当たります。スコットランドはイギリスの北方に位置し、東海岸にエジンバラ、西海岸にグラスゴーという二大都市があります。スミスは、エジンバラの少し北にあるカーコーディー

という小さな町で生まれ、小学校を卒業した後、14歳から16歳までグラスゴー大学で学びます。そしてグラスゴー大学を卒業した後、オックスフォード大学で６年間学んでスコットランドへ帰り、グラスゴー大学教授となって「道徳哲学」という科目を講義しました。

当時、「道徳哲学」と呼ばれた学問は現在の人文社会科学に相当し、人間と社会について広く考える学問で、その内容は自然神学・倫理学・法学・経済学の４部門に分かれていました。スミスは、グラスゴー大学で教えていた倫理学の講義を元にして、1759年に『道徳感情論』を刊行します。たいへんな名著で、この書物を読んだ倫理学者カントがスミスを非常に気に入ったと伝えられています。

スミスは、法学の書物を刊行しませんでした。しかしスミスの法学講義に出席していた学生が、講義を速記で書き取って清書したノートが２種類発見されています。それによって、いまではスミスの『法学講義』を日本語の翻訳でも読めるようになっています。

『道徳感情論』や『法学講義』を読むと、若いころのスミスは自由放任一元論で、政府介入に消極的だったことがわかります。しかしその後、スミスの思想を一変させる大事件が起きます。２回の金融危機です。これは後ほど詳しくお話しします。そのほかに、スミスが『国富論』を準備する過程で、政府のさまざまな活動とくに公共事業・公共制度と税制に大きな関心を持つようになったことがかれの思想に影響を与えました。こうして1776年に刊行された『国富論』では、自由放任と政府介入の二側面が共存するようになったのです。

上述のように、スミスの思想は生涯とともに大きく変化します。30歳代の前期スミスは自由放任一元論であり、小さな政府を支持し、貧富の格差を容認していました。しかし40歳代のころにさまざまな人生経験をして思索を続ける中で、50歳代に刊行した『国富論』では自由放任と政府介入の二側面を共存させるようになるのです。

ではスミスは、どのような経験をして、何を考え、『国富論』にたどり着いたのでしょうか。これが本日の講演の中心テーマです。ポイントは大きく３点あります。第１は、上に述べた金融危機です。スミスは２回の金融危機を経験して、世界観が大きく揺らぐことになります。第２は、スミスが『国富論』を執筆する過程で、当時の労働者の実情を非常によく調べたことです。『国富論』

の賃金論ではさまざまな時代と国のさまざまな職種の労働者の賃金が詳しく述べられています。スミスは賃金だけでなく当時の労働者の実情を詳しく調べて、労働者が非常に憂うべき状態にあることに気づきました。賃金は上がっていても、労働者が実際に働いている状態には大変な問題があることを認識して、スミスはそれに対処する方法を真剣に考えるようになります。その一つが、政府による労働者の初等教育への支援です。後ほど詳しくご説明します。

スミスの思想的進化の第３のポイントは平等思想です。若いころのスミスは、『道徳感情論』や『法学講義』で、貧富の格差を容認していました。しかし『国富論』では、平等が大切であるという考え方に変わっていき、その結果として、累進的な所得税と相続税を課すこと、つまり高所得者に高い税率の税金を課すことを提案するに至ります。

以上の３点、すなわち、金融危機、公教育、累進税が本日の講演の中心テーマです。以下で順番にお話しします。

## ２　金融危機と金融規制策

まずスコットランドの２回の金融危機についてお話しします。第１回は、1762～64年のスコットランド為替危機、第２回は1772～73年に起きる金融恐慌です。

第１回の1760年代為替危機のきっかけは、イギリスとフランスの七年戦争がイギリスの勝利で終わる見込みとなったことです。イギリス国債が値上がりすると予想され、スコットランドなどヨーロッパ各国からロンドンの国債市場へ資金が流れ込みました。そのためにスコットランドでは対ロンドン為替が急落し、銀行には銀行券を金銀貨と兌換する人々が殺到して、金融危機が起きました。

当時のスコットランドの銀行は、規模の異なる３グループに分かれていました。第１はエジンバラの２大認可銀行、第２はグラスゴーなどの中堅地方銀行、第３はエジンバラの零細な銀行業者です。

問題の発端となったのは、第３グループの零細な銀行業者が、小額銀行券を大量に発行するようになったことです。この小額銀行券は偽札が横行し、また零細な銀行業者はしばしば倒産して銀行券が無価値となりました。その結果、

スコットランド各地の地主層に小額銀行券の受け取りを拒否する動きが生じます。これに呼応して、エジンバラの２大銀行は、自分たちだけで銀行券の発行を独占しようとして議会に請願しました。この請願を受けて、国王は枢密院の３人に諮問します。３人の委員はいずれもスコットランド出身で、オズワルドとエリオットはスミスの友人、もう１人は王璽尚書マールバラ公でした。

この請願に驚いたのが、スミスが住むグラスゴーの地方銀行家でした。かれらは自分たちの銀行券発行の自由を守るために、活発な政治運動を行います。当時、グラスゴーの地方銀行は、商人などに銀行券を貸し出して５％の利子を受け取っていました。しかし銀行券の発行をエジンバラの２大銀行が独占すると、他の銀行は２大銀行に利子を支払って銀行券を借りてから商人に貸し出すことになり、利益が激減します。そこでグラスゴーなどの地方銀行は、自分たちの銀行券の発行の自由を維持するために、猛反撃に出ました。

グラスゴーでこの運動の中心となった人物が４人いました。１人目は、グラスゴー市長で、銀行家で大タバコ商人でもあったイングラム、２人目はグラスゴーの銀行家で大タバコ商人のグラスフォード、３人目がグラスゴーで最高の知識人であったスミス、４人目は以下で述べるミュア男爵です。イングラムとグラスフォードは、スミスの支援を受けながら、地方銀行の主張をまとめた２冊のパンフレットを刊行し、枢密院の３人委員会の１人であったマールバラ公に送って理解を求めます。このパンフレットの内容は、後に刊行される『国富論』と類似しており、スミスが強力にアドバイスしたと推定されています。上に述べた４人目の人物のミュア男爵は、政治家で大銀行家であり、ステュアートの叔父、スミスの友人、さらにマールバラ公の友人でした。

スミスは、1764年１月に、貴族のバックルー公の旅行付き添い教師としてフランスへ行くために、グラスゴー大学教授を辞職します。そしてロンドン滞在中に、３人委員会のマールバラ公に会いに行きます。おそらくオズワルドとエリオットも同席したでしょう。このときスミスが、銀行券の発行をめぐる問題について、マールバラ公たちを説得したことはほぼまちがいないと思われます。スミスがマールバラ公を訪問した数日後に、エジンバラの２大銀行の代表団がロンドンを訪れます。その代表団に対して、３人委員会は、われわれは発券の自由を支持する、つまりグラスゴーの銀行の主張を支持すると告げます。その翌日、マールバラ公はスコットランドの友人ミュア男爵に宛てた手紙で、スミ

スに会ったことを伝えています。おそらくミュア男爵が、スミスとマールバラ公の会見を設定したのでしょう。

こうして成立した1765年法は、グラスゴーの銀行とスミスの主張をほぼ全面的に取り入れたものとなりました。スミスは『国富論』で1765年法の内容を詳しく紹介して支持しています。

このときスミスが主張して1765年法で実現した発券の自由の原則は、その後のスコットランドで現在まで継続しています。世界のほとんどの主要国では銀行券の発行は中央銀行に集中するようになりました。日本でも現在は日本銀行だけが銀行券を発行しています。しかしスコットランドでは、いまも銀行券の発行が集中していません。私がスコットランドを初めて訪れたときにひじょうに驚いたのは、10ポンド銀行券が４種類も流通していることでした。１つはイングランド銀行、残りの３つはスコットランドの銀行の発行でした。

つぎに、1765年法の重要な項目である小額銀行券発行禁止についてご説明します。この法律で発行の自由が認められたのは金額の大きな銀行券だけで、１ポンド未満の小額銀行券の発行は禁止されました。これは何を意味するのでしょうか。

先に述べましたように，当時のスコットランドの銀行は、規模の異なる３グループに分かれていました。1765年法が定めた小額銀行券発行禁止は、第１グループのエジンバラの２大銀行と、第２グループのグラスゴーなどの地方銀行だけに発券の自由を認め、第３グループの零細な個人銀行に対しては発券の自由を禁止することを意味しました。当時、零細な個人銀行は信用がないために高額の銀行券を発行しても受け取ってもらえず、主に小額銀行券だけを発行していました。そのため、小額銀行券の発行を禁止することは、第３グループの零細な個人銀行による発券を事実上禁止することを意味したのです。

スミスは、『国富論』で、小額銀行券の発行を法律で禁止することを支持して、その理由を次のように述べています。

> このような小額銀行券の発行禁止は、疑いもなく、自然的自由の侵害とみなすこともできよう。しかし少数の人の自然的自由の行使は、もしそれが全社会の安全を脅かす恐れがあるのならば、最も自由な政府であっても専制的な政府と同じように法律によって抑制されるし、また抑制されるべ

きである。(『国富論』第２編第２章)

スミスはこの時点で、全社会の利益のために少数の個人の自然的自由を制限することはやむを得ないとはっきりと認めたわけです。ですから、小額銀行券の問題がスミスの思想に大きな影響を与えたことはまちがいないと思われます。以前のスミスは、政府が銀行に対して何もしないことが最良の政策であると述べていたからです。

こうして、この時期のスミスは、小額銀行券の発行禁止をめぐって、社会の利益のために個人の自然的自由の規制を認める方向へ第１歩を踏み出します。さらに第２歩を踏み出すのが、後述する1772年の金融恐慌です。

スミスは1766年にフランスからスコットランドへ戻ったあと、『国富論』の執筆に専念します。やがて1772年ごろに原稿をほぼ書き終えて、刊行の準備を始めます。そのときに起きたのが、1772年にロンドンから始まる金融恐慌でした。信用不安がロンドンからスコットランドやオランダへも波及し、各地の銀行が次々と連鎖倒産する大金融恐慌となりました。

スミスは、ほぼ完成していた『国富論』の刊行を延期して、銀行論の章の大幅な書き直しを迫られることになりました。当時、スミスは親友ヒュームと銀行業について意見が対立していました。ヒュームが銀行業は不安定と考えるのに対して、スミスは銀行業は基本的に安定していると考えていたからです。

1772年に金融恐慌が起きると、ヒュームはスミスに手紙を送り、その中で倒産した多数の銀行の名前を列挙しています。銀行業が不安定という私の意見の正しさがわかったでしょう、というわけです。ヒュームはスミスに対して、銀行論を考え直すことも勧めています。

実際、スミスは金融恐慌に大きなショックを受けて、『国富論』の刊行を延期し、銀行論を大幅に書き直すのです。そのころにスミスはエア銀行が倒産した原因を詳細に調べています。スミスがかつて家庭教師をしたバックルー公もエア銀行の大株主で、大きな損失をこうむったのです。

スミスがエア銀行の倒産の原因を調べると、驚くべきことに、倒産の主要な原因は巨額の不良債権でした。エア銀行は、スコットランドの企業家に膨大な貸付をしていました。貸付先の信用調査を十分せずに放漫貸付をしますから、債務不履行で返済されない不良債権が大量に生じたのです。

それだけではありませんでした。債務者側は、債務不履行で倒産するのを先送りするために、借金の借り換えをしました。一般に、借金は期限が来ると返済しなくてはなりませんが、そのときに新しい借金をして返済するといういわゆる借り換えをするわけです。そのたびに元金に利子が加わって借金は雪だるま式に増えていきますが、当面は返済を先送りすることができます。これは現在の日本政府の国債と同じです。日本政府は国債の償還期限が来ると、新たに借り換え債を発行して見かけ上は返済しますが、実際には利子が加わって、国債の総額は雪だるま式に増えています。

当時のスコットランドでは、投機的な企業家が借り換えを続けながら、銀行が借り換えに気づきにくい方法を考え出しました。スミスが『国富論』で詳しく説明している「振り出しと逆振り出し」という方法です。AとBの２人の企業家がチームを組んで、Aが借金をして返済期限がくると、Bが借金をしてAに代わって返済します。つぎにBの借金の期限が来ると、こんどはAが新しい借金をしてBに代わって返済します。こうして複数の企業家が交互に借入と返済を続けて行くと、銀行は借り換えに気づきにくくなります。一見したところ借金は規則的に返済されているように見えますが、実際には返済されずに元金に利子が加わって雪だるま式に増えていきます。企業家が借り換えを続けていると、元金に利子を加えた債務総額が増加し、銀行側から見れば債権総額が増加します。銀行は銀行券を発行して貸付をしますから、債権総額の増加は銀行券の発行総額の増加となりました。

正常債権の場合には、銀行券を借り入れた企業家は期限が来ると銀行券で返済しますから、銀行券の発行総額は増えません。また、不良債権が生じた場合にも、銀行が直ちに自己資本で不良債権の処理を行えば、損失はそれだけですみます。しかし不良債権が生じた場合に、債務者が借り換えをくり返して不良債権を隠すと、銀行の不良債権処理も先送りされて、不良債権は元金に利子を加えて雪だるま式に増加します。これは銀行が貸し付けて返済されない銀行券の発行総額が増えることを意味しました。やがて銀行が貸し付けた銀行券は銀行に返済されずに流通して第三者の手に渡り、その第三者が返済ではなく兌換のために銀行へ持ってきます。銀行は兌換請求があれば、銀行券と引き換えに金銀貨を渡さなければなりません。

スミスの説明によると、エア銀行は80万ポンドの銀行券を発行し、破綻した

ときに20万ポンドが流通していました。つまり差し引き60万ポンドが銀行に戻ったわけです。債務者がきちんと債務を返済する正常債権ならば、銀行券が返済されるので問題は生じません。しかし銀行券が債務者の返済ではなく、第三者の兌換請求で銀行へ戻ってきた場合には、銀行は兌換に応じなければなりません。ところが銀行は発行した銀行券の一部しか兌換準備金を用意していませんでした。スミスが示す例では、兌換準備率は20％程度と想定されています。80万ポンドの銀行券を発行した場合に、兌換準備率が20％ならば兌換準備金は16万ポンドです。

正常債権の場合には、貸し付けた銀行券は期限が来ると銀行券で返済されますから、兌換準備金の支出は必要ありません。しかし不良債権となって兌換請求されると、銀行は兌換に応じなければなりません。銀行の金庫はたちまち空となり、エア銀行はロンドンの金融機関から資金を借りてしのごうとしますが、結局最後に破綻しました。

こうしてスミスは、1772年恐慌を経験して、銀行制度と金融市場に根本的な不安定性があることに気づくのです。以下では、スミスの時代に限らず現代にも当てはまるような、一般的商品市場と金融市場との基本的違いについてご説明します。３点あります。

第１に、食品であれ衣服であれ一般的商品の取引では、ある価格で需要と供給が均衡して売買契約が成立すると、あとは商品を引き渡して消費するだけです。ところが金融市場では、ある利子率で資金需要と資金供給とが均衡して金銭貸借契約が成立しても、その後に債権債務と返済が残ります。たとえば住宅ローンでは、契約が成立したあとに債権債務が残り、20〜30年間債務の返済が続きます。つまり需要と供給の均衡で取引は完了せず、むしろそこから始まるのです。

第２の違いが不良債権です。金融市場では、契約のあとに、債務が返済される正常債権だけでなく債務が返済されない不良債権が生じます。先に述べましたように、不良債権は借り換えによって返済を先送りできるので、しばらくは正常債権に見せかけることができます。しかしながら、債務は元金に利子が加わって雪だるま式に膨れ上がっていき、最後に借り換えができなくなると破綻します。

第３の違いが連鎖倒産です。一般的商品の場合には、一つの企業が倒産して

も、その取引先しか連鎖倒産しません。最初に倒産した企業と取引関係のない別の企業が連鎖倒産することはありません。ところが銀行の場合には、まったく取引関係のない銀行が次々と連鎖倒産します。なぜかといいますと、ある銀行が倒産すると、他の銀行も倒産するのではないかという信用不安が拡がります。預金者は、ある銀行が倒産すると、その銀行とは取引関係がなくても、自分が預金している別の銀行も倒産するかもしれないと不安になって、預金の引出に殺到します。銀行が保有する現金は限られていますから、信用不安が拡大して預金者が殺到すると、支払いができなくなって倒産するのです。スミスの時代には、銀行は兌換銀行券を発行しており、兌換請求に応じて銀行券を金銀貨と交換しました。しかし銀行が倒産すると、銀行券はただの紙切れになり兌換されなくなります。そのために、銀行が倒産するかもしれないという信用不安が拡大すると、銀行券を持っている人は倒産しないうちにと考えて、急いで兌換を請求します。しかし銀行は、通常は20％程度の兌換準備金しか用意していないので、兌換請求が殺到するとたちまち兌換準備金が払底して兌換に応ずることができなくなり破綻するのです。このように信用不安が生じて銀行が連鎖倒産することが金融市場の大きな特徴です。1772年に少数の銀行が倒産したことから信用不安が各地に拡がり、やがてロンドンとスコットランドとオランダの多くの銀行が倒産する大金融恐慌になりました。

スミスは、『法学講義』で、銀行がたくさんあれば１つぐらい倒産しても大きな問題ではないと述べています。しかしスミスはこの考えが完全に間違っていたことを後に自覚することになりました。銀行は１つ倒産しただけでも、信用不安が拡大すると世界恐慌にもなりかねないのです。ですから、いわゆる「見えざる手」つまり市場の自動安定メカニズムは金融市場には存在しないのです。

2009年にリーマンショックが起きたときに、ノーベル経済学賞の受賞者であるスティグリッツは、「なぜ見えざる手が見えないかがわかった、存在しないからだ」と述べました。スミスは、スティグリッツよりも200年以上も前に、金融市場に見えざる手が存在しないことを認識したのです。

では、どうしたらよいのでしょうか。スミスは、『国富論』で、金融恐慌の再発を防止するためにさまざまな提案をしています。スミスがとくに重視したのは、不良債権が生じたときに、借り換えをやめさせることでした。というのは、借り換えつまり借金の返済のための新たな借金をくりかえすと、当面は先

送りすることができますが、債務総額は元金に利子が加わって雪だるま式に増えてしまうからです。

スミスが提案する借り換え防止の第１の対策は、真正手形原則です。これは、銀行が手形を割り引いて貸し付ける場合に、真正手形つまり事業の裏付けがあって期限がくると返済できる手形だけを割り引いて、融通手形つまり借り換えのために発行される手形を割り引いてはならないという原則です。

第２の対策は、手元現金原則です。これは、銀行が貸し付けるのは、企業家が支払い準備のために短期間手元に置く現金だけに限定して、固定資本や流動資本への長期貸付はしないようにするという原則です。当時の銀行は貸付をする相手の信用を調査する能力が非常に低かったので、しばしば不良債権が生じました。スミスは貸付相手の信用を調査する能力が銀行に比べて高かった個人投資家だけが長期の資本貸付を行い、銀行は行うべきではないと主張しています。信用調査能力の低い銀行でも、手元現金への短期貸付ならば、返済の規則性を観察することによって相手の信用を判断できると考えたのです。

## ３　労働者階級の状態と公教育

最初に、本日はスミスの大きな政府論に関連する３テーマについてお話しすると申しました。以上で第１のテーマである金融規制策を終えて、つぎに第２のテーマである労働者階級の初等教育への公的支援についてお話しします。

スミスは『国富論』の執筆を準備する過程で、当時の労働者階級の実情を詳しく調べました。『国富論』の賃金論を読むと、スミスがさまざまな時代と国のさまざまな職種の労働者の賃金を非常に詳しく調べたことがわかります。スミスが調べたのは賃金に限られませんでした。スミスは、労働者階級の生活が実際にどのような状態であるかについて詳しく調べた結果、労働者階級がひじょうに憂うべき状態にあることに気づくのです。

スミスは、分業によって、労働者の仕事が分割されて単純作業へ特化すると、労働者の知的能力が衰退することを指摘しています。たとえばピンマニュファクチャーでは、ある労働者は朝から晩まで針金を延ばすだけ、別の労働者は朝から晩まで針金を切るだけの作業を担当します。このような単純作業だけを一日中している労働者は理性を働かせる機会がないので、知的能力が衰退しても

のごとを考えられなくなります。また社会的能力も衰退して会話ができなくなり、社会問題への関心もなくなります。スミスは労働者階級のこのような状態を深く憂えています。

では、労働者階級がそうした状態に陥ることを防ぐにはどうしたらよいのでしょうか。スミスは、労働者階級のすべての子どもが小学校で教育を受けられるようにすることを提案します。どれほど貧しい労働者の子どもでも小学校へ通えるように、財政的な支援をして授業料を非常に低額にするのです。それだけではありません。スミスは、小学校で、読み書き計算だけでなく、幾何学と機械学の初歩を教えることを提案しています。つまり基礎的な技術教育です。なぜかというと、スミスは、労働者が仕事をしながら道具や機械や作業方法を改善することを期待したのです。スミスは『国富論』で、少年工がバルブのハンドルと機械の他の部分をヒモで結びつけることを思いついたという例をあげています。つまりスミスは、労働者が小学校で基礎的な技術教育を受けて、仕事をしながらいろいろな改善を工夫することを通じて知的能力を高めていくことを期待したのです。

## 4　経済的格差と累進税

次に、スミスの大きな政府論に関連する第3のテーマである累進税についてお話しします。税金の話に入る前に、スミスの平等思想の進化についてお話しします。スミスは、若いころの『法学講義』では不平等容認論でしたが、『国富論』では平等主義に変わります。どうしてスミスは平等についての考え方を大きく変化させたのでしょうか。

スミスは、『法学講義』では、文明社会に貧富の格差があってもよいと考えていました。なぜスミスは文明社会の経済的格差を容認したのでしょうか。スミスは、北米インディアンのような未開社会とヨーロッパの文明社会とを比較しています。未開社会では、人々は平等ですが、皆が貧しい生活をしています。これに対してヨーロッパの文明社会では、分業と農工商業が発展し、貧富の格差は拡大しますが、文明社会のもっとも貧しい労働者でも、北米インディアンなどの未開社会の首長よりも豊かな消費生活をしています。つまりスミスは、文明化とともに貧富の格差が拡大しても、最底辺の労働者の生活状態が大きく

改善されるならば、経済的格差が拡がることは容認されると考えたのです。

しかしスミスは、『国富論』を準備する過程で、文明社会の将来の発展について考えるようになります。スミスは、文明社会はすでにかなり豊かになっているのだから、今後は経済的格差を縮小して平等化をめざすべきではないかと考えるようになるのです。

スミスは、文明社会では、資本が増加するにつれて賃金率が上昇し利潤率が低下するので、貧富の格差は縮小傾向にあると考えていました。それに加えて、かれは、税制も格差を縮める方向で活用するべきと考えるようになります。スミスは、若いころの『法学講義』では、税金は経済活動を妨げないようになるべく少ないほうがよいという考え方でした。しかし『国富論』では、富者に重く貧者に軽い累進的な税制を通じた貧富の格差の是正を主張するようになります。スミスは、税制についていろいろな提案をしているのですが、その中でもスミスの考え方がよくわかる例をいくつかご紹介します。

第１は、道路通行税です。当時の道路通行税は道路の補修費用に用いられたので、馬車の重さに比例していました。重い馬車は道路が傷むので、補修費用の負担を重くするのです。ところがスミスは、金持ちの高級馬車は、重さに比例する以上の高い通行税をとり、貧しい人の馬車は重さに比例するよりも安い通行税をとることを提案して、「富者の虚栄心をごく無理のないやり方で貧者の救済に役立たせることができる」と述べています。

次は、家賃税です。家賃は高所得者ほど所得に占める比率が大きいので、家賃税も高所得者ほど所得に対する税負担率が高くなります。スミスはそれを肯定して、金持ちほどたくさん税金を払うのがよいと述べています。

スミスは、上述のように富者の負担が重い累進税を支持する一方で、富者の負担が軽い逆進税をきびしく批判しています。たとえば、農民が高い税金を支払い貴族は税金を支払っていない国について、税制が不公平を緩和するどころかいっそう拡大していると批判しています。

所得税も同様です。スミスの時代にはすべての所得を合計して課税する制度はなく、地代・利潤・利子・賃金などの所得ごとに課税されていました。スミスは、高所得層の地主の地代だけに課税して、中低所得層が大半を占める資本家の利潤と労働者の賃金には課税するべきではないと主張しています。これも一種の累進税と言えるでしょう。

それだけではありません。スミスは、地代に課する土地税（地租）について、フランス型とイギリス型とを比較しています。フランス型の変動土地税は、地代が増加すると課税標準となる土地の評価額も増加して税金も増加します。他方イギリス型の定額土地税は、地代が増加しても土地の評価額と税金は不変で、地主の税負担率は低下していました。スミスは『法学講義』では、イギリス型の定額土地税は、地代が増加しても税金が増えないので、地主の土地改良の意欲を妨げないので良いと支持していました。しかし『国富論』では、英仏の土地税制への評価を逆転させて、地代の増加に比例して地主の税負担が増加するフランス型の変動土地税を公平な税制として支持するようになります。

スミスは、相続税についても累進税を支持しました。かれは、古代ローマ、スコットランド、オランダなどの相続税を考察しています。スミスは、オランダの累進的相続税をとくに詳しく紹介しており、イギリスも累進的相続税を導入することがのぞましいと考えていたようですが、明示的な提案はしていません。

その後、スミスの意図を汲んで相続税の改革を推進したのが首相小ピットでした。親子が同名のウィリアム・ピットなので、父親が大ピット、息子が小ピットと呼ばれています。小ピットは、学生時代に『国富論』を読んで非常に感銘を受け、24歳でイギリス史上最年少の首相になると、『国富論』に書かれているスミスの政策提案を次々と実現させていきます。まずインド法を成立させて、スミスがきびしく批判していた東インド会社の特権を削減します。つぎに、英仏通商条約（イーデン条約）を締結して、スミスが強く主張していた英仏両国の自由貿易を実現させました。

その小ピットが、スミスの没後に、相続税の大改革を実施します。ピットの相続税改革案は、スミスが『国富論』で支持していた相続税制度とよく似ています。当時のイギリスの相続税は１％の定率印紙税でした。スミスが『国富論』で支持し、小ピットが議会に提案したのは、印紙税を直接課税に変えて、１％の定率ではなく累進的な税にすることでした。さらに、当時のイギリスの相続税は動産だけに課されていたのですが、スミスは不動産にも相続税を課すことを主張しました。小ピットは、動産だけでなく不動産の相続税もイギリス議会に提案しますが、不動産の相続税は地主層の反対で実現しませんでした。スミスの『国富論』は、経済学の歴史においておそらく最初に累進的相続税につい

て語った書物であり、しかもその端緒的実現にも寄与したと考えられるのです。

最後に消費税の改革についてお話しします。消費税は、富者が主として負担する奢侈品消費税と、貧者が主として負担する必需品消費税では性格が大きく異なります。イギリスでは、名誉革命のころに奢侈品消費税が導入されました。その後18世紀になって、政治家ウォルポールは、一方で地主が負担する土地税を大幅に減税するとともに、庶民が負担する塩や石けんなどの必需品消費税を導入しました。その結果、ウォルポールへの地主層の支持が強まり、ウォルポールは長期安定政権を維持しますが、他方で、庶民は必需品消費税に苦しむことになりました。

スミスが『国富論』で提案している税制改革は、ウォルポールとちょうど反対です。先に述べましたように、スミスは、一方で地主が負担する土地税を地代の増加に比例して増税するフランス型税制へ改革することを主張すると同時に、他方で消費税については、富者が主として負担する奢侈品消費税を維持しつつ、庶民が主として負担する必需品消費税を廃止することを提案しています。

最後に、奢侈品消費税の中でも、貧者の奢侈品と言われたビールやエールに対する消費税についてのスミスの改革案を見ておきます。当時、ビール税、エール税、麦芽税という３税がありました。そして労働者階級が支払うビールやエールの価格にはこれら３税がすべて含まれていたのに対して、自家醸造を行っている中上流階級は、ビール税とエール税を負担せず麦芽税だけしか負担していませんでした。この逆進的で不公平な税制に対して、スミスは、ビール税とエール税を廃止して麦芽税に一本化することを提案しています。スミスは、酒税についても、労働者に重く富者に軽い逆進的な税制を改革することを主張したのです。

## ５　おわりに―福祉国家思想の先駆者スミス―

最後に、以上ご説明してきたスミスの思想を、全体としてどう捉えるべきかについてお話しします。1980年代から、スミスを新自由主義の先駆者として捉えるべきか、それとも福祉国家思想の先駆者として捉えるべきかという議論がされてきました。1980年代に米国のレーガン大統領や英国のサッチャー首相の新自由主義的政権が登場したときに、スミスはしばしば新自由主義のシンボル

として利用されました。たとえばレーガン大統領の選挙運動員は、スミスの顔をプリントしたスミスネクタイを締めて選挙運動をしました。しかしスミス研究者の中には、スミスを新自由主義の先駆者ではなくむしろ福祉国家思想の先駆者として考えるべきであるという意見が当時からありました。その後、スミスを福祉国家思想の先駆者として捉えるスミス研究者は増え続けています。私もその一人です。

世界で福祉国家と呼ばれる国々はひじょうに多様ですが、その多くに共通する政策があります。第１は累進税です。累進的所得税や累進的相続税は多くの福祉国家に共通する税制です。第２に、財政支出によって低所得層の教育費負担を軽減して、教育の機会均等を実現することが多くの福祉国家に共通する政策です。第３に、金融規制によって金融を安定化させる政策も多くの福祉国家で行われています。他方で、新自由主義と呼ばれる国々では、高所得層を減税し、教育費の個人負担を増加させ、金融規制を撤廃して自由化を推進しています。

本日ご説明したように、スミスは、金融規制を強化し、富裕層に累進的税負担を課して、低所得層の教育費負担の軽減による教育の機会均等の実現を目ざしました。こうした点を考慮するならば、スミスは、新自由主義ではなく福祉国家思想の先駆者とみなすことができるのではないでしょうか。

最後にスミスの政府介入についてまとめます。本日のお話の冒頭で、スミスの『国富論』に自由放任と政府介入の二側面が共存していることを謎と呼びました。この謎はどうしたら解けるでしょうか。重要なことは、２種類の政府介入を区別することです。第１は、封建制、絶対王政、重商主義などの、19世紀に自由主義国家が成立する以前の旧い種類の政府介入です。そして第２は、20世紀に登場する福祉国家の先駆的形態とみなしうる新しい種類の政府介入です。

スミスは、一方で、封建制や重商主義などの旧い種類の政府介入をきびしく批判して自由放任を主張しました。それと同時に、福祉国家の先駆ともいえるような新しい種類の政府介入、すなわち金融規制、公教育、累進税を支持したのです。言いかえるならば、スミスは、旧い種類の政府介入を批判して、新しい種類の政府介入を支持したのです。したがって、スミスの『国富論』に、自由放任と政府介入の二側面が共存していることは、不思議ではありませんし謎でもありません。スミスが主張した自由放任は旧い種類の政府介入への批判で

あり、スミスが支持した政府介入は新しい種類の政府介入だからです。以上、ご理解していただけたでしょうか。本日はご静聴ありがとうございました。

**参考文献**

(1) 新村聡（2016）「アダム・スミス」、川波洋一・上川孝夫編『現代金融論［新版］』有斐閣、98-99ページ。

(2) 新村聡（2018）「アダム・スミスにおける大きな政府論の形成過程に関する一考察――『法学講義』から『国富論』への租税論の発展――」『岡山大学経済学会雑誌』49（2）、1-15ページ。（http://doi.org/10.18926/OER/55673）

(3) 新村聡（2023）「福祉国家思想の先駆者としてのスミス」『思想』2023年11月、11-24ページ。

# スミスを継いだマルサスとリカードウから受け継ぐもの

出雲　雅志
（神奈川大学教授）

## 1．はじめに

アダム・スミス生誕300年を記念する講演会でなぜマルサスとリカードウなのか。そう思われるかたもおられるにちがいありません。はじめにその理由を説明しておきたいと思います。

トマス・ロバート・マルサス（Thomas Robert Malthus: 1766年２月13日-1834年12月29日）とデイヴィド・リカードウ（David Ricardo: 1772年４月18日-1823年９月11日）は、スミス（Adam Smith: 1723年６月５日-1790年７月17日）とはまったく異なる時代、異なる歴史を生きていたように考えられがちです。ところがふたりは、スミスが『国富論』を出版する少し前に生まれ、スミスの生きた時代を20年ほどいっしょに生きていました。この事実が指摘されることはあまりありません。スミスはスコットランド、マルサスとリカードウはイングランド、と離れていましたが、ふたりが20年前後にわたってスミスと「同時代」をともに生きていたことは記憶しておいてもよいのではないでしょうか。

もちろん、ただ同じ時代を生きていたことに意味があるというわけではありません。「経済学」という新しい学問分野が形づくられつつあったこの時代に、『国富論』をとおしてスミスの経済理論と経済思想の核心を受け継いだのがマルサスとリカードウのふたりだった。このことが重要です。スミスとのあいだに直接的な人間関係があったわけではありませんが、ふたりはともにスミスの「直系」の弟子だったと言えます。とすれば、マルサスとリカードウを取り上げることによって、逆にスミスの「精神」（ケインズの言葉：後述）の一端を浮き彫りにすることができるのではないか。それが、先人の研究に学びながら、ここでお話ししたいことです。

マルサスとリカードウはスミスよりもおよそ40年から50年ほど後に生まれま

した。スミスが18世紀の70年近くを生きたのに対し、マルサスとリカードウはともに18世紀と19世紀をまたいで生きています。この18世紀の後半から19世紀はじめは革命と戦争の時代です。産業革命と農業革命が進展し資本主義体制が成立するとともに、その仕組みと課題を明らかにしようする経済学という新興の学問が確立していく時代でもありました。マルサスとリカードウは、産業革命のただなかを生き、ともにスミスの『国富論』に学んで、物価の高騰や為替の下落、安価な穀物輸入、不況、貧困など、多岐にわたる新たな時代の困難と課題に立ち向かいます。スミスの『国富論』はそのための「導きの糸」となったのです。

このなかから、きょうはとくに、いまなお世界が直面する「貧困」と「食糧」という２つの課題をとりあげ、スミスのまなざしを継承したマルサスとリカードウから今日わたしたちが受け継ぐべきものはなにか、考えてみたいと思います。

## ２．マルサスとリカードウに対するケインズの評価

マルサスとリカードウの話をするとき、必ずと言っていいほど引きあいに出されるふたりに対するケインズの評価があります。これを紹介することからはじめたいと思います。

> もしかりにリカードウではなくマルサスが、19世紀の経済学がそこから発した根幹をなしてさえいたなら、今日、世界はなんとはるかに賢明で富裕な場所になっていたことであろうか！（ケインズ『人物評伝』136頁）

これまで幾度となく繰り返されてきたジョン・メイナード・ケインズによるマルサスとリカードウに対する評価です。経済学の歴史のなかに埋もれていたマルサスの復位をはかるとともに（その弾みで？）リカードウを「批判」したケインズの言葉――。この有名な批評は、概して、ケインズが自らの先駆者として見いだしたのは、リカードウに反駁してセー法則を否定し一般的過剰生産の可能性を主張したマルサスであった、と理解されてきました。この理解はまちがいではありません。しかしよく言われるように、ケインズはリカードウをまったく評価していなかったのか、と言えば、そうではありません。マルサス

を称揚したケインズが取り組んだのは『マルサス全集』ではなく『リカードウ全集』の刊行だったからです。直接の証拠にはならないものの、これを無視することはできません。

イギリス王立経済学会が1925年頃に企画した『リカードウ全集』の編纂事業は、学会の事務局長（1912-44）を務めていたケインズによって遂行されます。編集にあたったのはイタリア出身のピエロ・スラッファ。ケインズを介してケンブリッジ大学に招かれ、ケインズの影響でリカードウ研究をはじめた俊才です。編集作業は困難を極めたものの、ケインズの惜しみない助力もあって、ついに1951年『リカードウ全集』全11巻の刊行が開始されます（1973年の総索引巻で完結。ケインズはその刊行を見届けることなく1946年に亡くなります）。こうした経緯をみれば、この『リカードウ全集』刊行の事実上の組織者・世話人がケインズであったという事実を否定することはできません。

ここから、マルサスとリカードウのあいだで交わされた多様な論争の歴史的意義をきわだたせたのが、マルサスを高く評価したケインズとリカードウ研究に力を注いだスラッファだったのはたんなる偶然なのか、という疑問が生じます。おそらく偶然ではありません。20世紀前半に起きたロシア革命と２つの世界大戦と大不況のなかで、マルサス・リカードウ論争のゆたかな理論と思想を解き明かし、経済学の可能性を復権すること。ここにケインズとスラッファのねらいがあったのではないかと考えられるのです。きょうのお話の問題意識もここにあります。

## ３．マルサスとリカードウの時代

### ３－１）スミス・マルサス・リカードウとその時代

スミスが生まれてからマルサスとリカードウが亡くなるまでの110年あまりはどのような時代だったのでしょうか。マルサスとリカードウを中心にその生涯を最後のページに年表にまとめていますのでご参照ください。年表にはこの時期の話題の本を２冊だけ紹介しています。スミスが生まれて３年後に出版されたジョナサン・スィフトの『ガリヴァー旅行記』とリカードウの『経済学および課税の原理』が刊行される前年の1816年に出版されたメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』です。どちらも時代を象徴する作品と言えます。

さて、この110年あまりの時代の特徴をおおまかにまとめてみたいと思います。

第１はバブル経済のはじまりの時代であることです。スミスが生まれる少し前、18世紀初頭に欧米でバブル経済が発生します。バブル経済は1637年にオランダで起きたチューリップ・バブルまでさかのぼることができます。しかし今日につながる投機ブームが反復するようなバブル経済が本格的にはじまるのは、1719年のフランスのミシシッピ計画とその翌年1720年のイギリスの南海泡沫事件からです。この南海泡沫事件は英語でSouth Sea Bubble。これがバブル経済の語源となりました。

第２は新大陸植民地の独立とアジア・アフリカの植民地化の時代です。イギリスの植民地だったアメリカが独立を宣言したのは1776年。スミスの『国富論』刊行と同じ年です。第３は啓蒙と進歩の時代です。フランスでは百科全書が刊行され、ヨーロッパ全体に啓蒙と進歩を主張する知的ネットワークが形成されました。自然に存在するすべてを対象とする学問・自然史（博物学）が生まれ、知の枠組みが宗教から科学へ移行して世俗化がはじまります。第４は革命と戦争の時代です。1789年に起きたフランス革命とその理念の拡大を大義とするナポレオン戦争（実体は侵略・征服戦争）は、ヨーロッパ全土に大きな社会変動をもたらしました。ヨーロッパの封建体制の崩壊と「近代への移行」という大きな流れとその反動（ウィーン体制）の時代と言ってもよいでしょう。

第５は科学と技術の時代です。スミスが生まれたときにロンドン王立協会の会長を務めていたアイザック・ニュートンは観察と実験を基礎とする17世紀の科学革命を体系づけた人物ですが、18世紀・19世紀にはニュートン力学を土台に、化学や地学、天文学といった分野で大きな発展がありました。経済学もそのなかのひとつとして生まれたものです。第６は産業革命と農業革命の時代です。工業化と都市化の進展をもたらし、格差が拡大して階級社会ができあがっていきます。

### ３-２）マルサスとリカードウが直面した課題

こうした時代にスミスの『国富論』を学んだマルサスとリカードウは、スミスを継承しながら、この時代の新たな課題に立ち向かいます。どのような課題だったのでしょうか。

第１に、産業革命は飛躍的な生産力増大をもたらしました。しかし18世紀末から19世紀はじめのイギリス社会では労働者の貧困が深刻な問題となります。

スミスが『国富論』で唱えていたのは市場経済のもとで富裕が最底辺の人びとにもゆきわたる資本主義社会です。ところが現実の社会はそうなりませんでした。人びとが健康で幸福に生きられる社会の実現はまだこの時代の重要な課題として残されていたわけです。

第２に、18世紀末には食糧不足や物価高騰によって農村が困窮し、農業革命による人口増加と産業革命による工業化・都市化の進展は貧しい労働者階級をうみだして貧困と道徳的退廃が社会に広がります。フランス革命の影響を受けながら、急進主義・無政府主義・社会主義といった思想が登場するのもこの時代です。貧困の原因を明らかにし、どのような対策をとるのか。多様な思想と対峙しつつ貧困の解消をめざすことも重要な課題となりました。

第３に、貧困にあえぐ人びとを救済するための救貧制度の改革です。従来の救貧院（ワークハウス）に収容する貧窮者のみの救済から、教区が低賃金労働者の安い賃金の補填を行うスピーナムランド制度（1795年）へと救済の対象が拡大されました。しかし、救貧税・救貧支出の増大は税負担を強いられる中小地主の不満を高め、他方ではナポレオン戦争の勃発とその終結後の不況で失業者が増加します。

第４に、ナポレオン戦争によって穀物価格の高騰や輸出入の制限という問題が生じました。第５に、イングランド銀行の兌換停止（1797年）後の物価騰貴と為替下落などは通貨・銀行制度への批判をうみだします。

これらは、人口原理をめぐる論争や地金論争、穀物法論争、救貧法論争など、社会全体を巻き込む大きな論争に発展していきます。今日でも同じような問題が議論されていますが、200年たったいまでも議論の基本的な要点はそれほどかわりません。その意味では、こうした多岐にわたる課題に直面しそれと格闘したマルサスとリカードウからいまなお学ぶことは少なくないと言えるでしょう。

### ３-３）マルサス・リカードウの立場とその経済学

マルサスとリカードウが生きた時代の課題をめぐるおおまかな対抗関係を示しておきたいと思います。マルサスとリカードウは理論的・思想的に「対立」関係にあると考えられることが少なくありません。しかし大きなくくりでいえば、ふたりはともに古典派経済学という枠組みを共有し、一方では急進主義・

社会主義と、他方では保守主義と、その双方に対峙する立場をとっていました。

1798年に刊行されたマルサスの『人口論』初版は、直接にはアナーキストであるウィリアム・ゴドウィンの平等主義思想を批判することを目的としています。この初版にはマルサスの名前が記されていません。マルサスの名前が明記されたのは1803年に出版された第２版からです。

また、リカードウは差額地代論をもとに階級間の分配動向を明らかにすることによって、事実上、労働者・資本家と地主との対立関係を理論的に示唆しました。

しかし対立関係があるからといって、ただ憎悪し敵対しあっていたわけではありません。たとえばリカードウの場合です。ロバート・オウエンが失業対策として提案した協同社会構想を議論するケント公が主宰する委員会のメンバーに加わり（反対意見を表明)、また、オウエンが宗教を否定したことが非難の対象にされているときにも信教の自由と宗教を議論する自由を唱え、オウエンが自らの宗教観を表明する自由を擁護しています。思想や立場は異なっても、貧困の克服をはじめ児童の労働や教育への取り組み、社会改良という視点は、その立場を超えて共有していたとみることができるでしょう。

では、マルサスとリカードウの経済学はどのような特徴をもっていたのでしょうか。それは、近代の産業革命とともに出現し、その歴史的特色を分析の中心とするものでした。スミスをはじめとする経済学はその後、古典派経済学と呼ばれるようになります。この古典派経済学が分析の対象とした産業経済は、産業革命以前の交易を中心とした経済とは異なります。生産は労働を投下すれば無限に増加する、技術進歩によって絶えず進化する、しかもそれらが社会をも変えてゆく、というものでした。アダム・スミスの『国富論』はそうした視点と観察から経済を分析したものです。労働による生産と分業による生産性の絶えざる上昇というスミスの考えは、その経済観と経済学の枠組みをよく表しています。

こうした経済学の枠組みからみれば、リカードウとマルサスによって19世紀はじめに確立される古典派経済学は、このスミスの基本的な考えを受け継ぎ共有していた、と言うことができます。ふたりはともにアダム・スミスの『国富論』から出発し、そのなかから異なった要素を自らの理論体系に取り入れ、それぞれの特色をもつ経済学を確立しました。しかし古典派経済学としての基本

的な特徴が異なるわけではありません。ふたりの特色の違いもそれをめぐる論争も、あくまで古典派経済学という枠内でのことであったとみなければなりません。ふたりは、方法論でも、現実の経済の見方でも、あるいは経済の発展のあり方や政治思想・社会思想においても、共通の土台のうえに立っていましたが、それでもなお異なった見解を示した、と言ってよいと思われます。

## 4．貧困と食糧をめぐるスミス・マルサス・リカードウ

貧困と食糧をめぐる３人の視点と理解はどのようなものだったのでしょうか。スミスは労働貧民の生活改善と労働者の高い賃金を提唱し、貧困の克服を経済成長（分業）にもとめました。スミスを継承したマルサスとリカードウも基本的には同じような見方をしています。

### 4－1）スミスの貧困へのまなざし

スミスは労働貧民の生活改善と社会の幸福について以下のように述べています。

> 贅沢が最下層の人々にまで広がっているとか、労働貧民たちは昔かれらが満足していたのと同じ衣食住ではもはや満足しないだろうとか、という不平をよく聞く……。下層の人々の生活条件が改善されることは、社会にとって利益とみるべきか、それとも不都合とみるべきか。答えは明白である。さまざまな使用人、労働者、職人は、すべての巨大な政治社会の圧倒的大部分を構成する。この大部分の生活条件を改善することが、その全体にとって不都合とみなされるわけはない。どんな社会も、その成員の圧倒的大部分が貧しくみじめであるとき、社会が隆盛で幸福であろうはずはない（『国富論』(1) 133-134頁）

「どんな社会も、その成員の圧倒的大部分が貧しくみじめであるとき、社会が隆盛で幸福であろうはずはない」と断言するスミスの視点とメッセージは明確です。スミスのこの言葉は宮沢賢治が「農民芸術概論綱要」に書き記した「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」を想起させます。しかしスミスにはより具体的な経済社会に関する考察がありました。そのひと

つが、高い賃金は勤勉と体力を増進する、という主張です。

> 豊かな労働の報酬が増殖を刺激するように、同じく庶民の勤勉をも増進させる。労働の賃金は勤勉の刺激剤であって、勤勉というものは、他の人間のすべての資質と同じように、それが受ける刺激に比例して向上するものである。生活資料が豊富であると労働者の体力は増進する。また、自分の境遇を改善し、自分の晩年が安楽と豊富のうちにすごせるだろうという楽しい希望があれば、それは労働者を活気づけて、その力を最大限に発揮させるようになる（『国富論』(1) 138 頁）

スミスのこうした視点は、この30年ものあいだ賃金がまったく上がらないばかりか、老後に「楽しい希望」をもつことさえできない現在の日本社会には、なによりも必要とされるものと言えるのではないでしょうか。スミスは「労働」こそが必需品と快適品の源泉であり、また、文明社会ではもっとも貧しい者ですら「未開」人よりも富裕である、そして最下層にまで富裕をもたらすのは分業の進展の結果だということも、忘れずに指摘しています。

### 4－2）マルサスとリカードウの貧困へのまなざし

このスミスの貧困へのまなざしをマルサスとリカードウはともに受け継ぐのですが、ふたりのあいだには大きな相違もありました。その違いは経済発展の基盤とその方向、また、それにもとづく経済政策にあります。

リカードウは国際分業による発展を志向しました。この場合イギリスは、工業を発展させ、食糧や原料は輸入に依存するという方向をとることになります。これに対してマルサスは、自由貿易を基本的には支持しながらも、食糧に関しては国民の生存に不可欠な生産物であるという理由から自給に近い国内生産を維持する必要があると考えました。

そのためマルサスは、スミスの経済成長論では農業よりも工業の発展が優先されるので、貧しい労働者の生活をゆたかにする食糧生産の増大が置き去りにされる、とスミスを批判します。マルサスは人民の大部分をしめる労働者の厚生（well-being）を高めるのは、農業と工業とが適切な割合で発展する経済であると考え、食糧については自給またはそれに近い状態を維持できるよう農

産物輸入の規制が必要であるとみたのです。この考えには、フランス革命とその後のナポレオン戦争のあいだ農産物の輸出入の禁止や制限が行われたという現実の経験が反映されているとみられます。

これに対してリカードウは、貿易によって輸出国と輸入国とが長期的に強く結びつけば、輸出国は容易には輸出を制限ないし禁止することはできなくなるとみていました。このリカードウの考えの背景には、ナポレオン戦争でも輸出入が途絶えたわけではないという事実もあります。しかしより重要なのは、リカードウの基本的な理論がそこにあるということです。それは、技術が一定のもとでは、経済成長が続くと、農業において収穫逓減が作用する結果、食料価格が上昇し、賃金率が上がって利潤率が低下する、すると経済成長も低下し、最終的にはゼロ成長の状態つまり定常状態にいたる、というものです。そこで、この定常状態を回避あるいは先送りするには、外国から安い食料を輸入するほかない、そのために農産物を含めた一般的な自由貿易を主張する、ということになるわけです。

しかしマルサスは、リカードウのようには考えませんでした。スミスとリカードウに共通する工業の発展という視点からではなく、人口と食糧との成長率の差によってつねに人口が食糧を超えて増大する傾向をもつという人口原理から問題が検討されています。この人口原理というのは、食糧は１、２、３、４、５と等差級数的な比率でしか増大しないのに対し、人口はなんの制限もなければ、１、２、４、８、16と等比級数的に増大する、つまり人口はつねに食糧の増大を超えて増加する傾向がある、というものです。食糧と人口とのこの関係は自然の法則とみなされました。この法則から人間は逃れられないというのがマルサスの基本的な立場です。この立場からみれば、自由貿易が行われるなら食糧の輸出入も自由にまた十分に行われて労働者がゆたかになる、とは簡単には言えません。じっさいには自然災害や戦争などによって食糧の自由貿易ができるとはかぎらないからです。だから、人間が生きていくうえで必要な食糧は基本的には自給する必要がある。これがマルサスの考えであり立場でした。

穀物の自由な輸入を制限する穀物法の廃止に賛成したリカードウとそれに反対したマルサスの、それぞれの考え、理論、立場は以上のようなものです。マルサスとリカードウのあいだで交わされたこの論争から20年あまり後の1846年に穀物法は廃止されます。ところがマルサスとリカードウの後を継いだジョン・

ステュアート・ミルは、人口の増大を超える資本蓄積（食糧の増大）が実現したと多くのひとが考えるようになった19世紀半ば以降も、人口は制限がなければ増大するというマルサスの人口原理を、どのような経済体制であったとしても、生産を制限する根本的な自然法則とみていました。

ふたりのこうした対照的な考えは、政治の見方にも表れ、議会改革や農業政策などでも異なった見解を示すことになります。また、ふたりの経済学の方法論、経済の見方の違いは、救貧法への取り組みにも反映されていきます。救貧法といえば、マルサスばかりが救貧法に反対した冷酷な人間だったとみなされがちですが、むしろリカードウのほうが徹底的な救貧法廃止論を主張しました。マルサスは原則的な廃止論であり、短期的には現実にある事態を考慮し、柔軟な対応が必要であると考えています。

ふたりの救貧法廃止の主張（とくにマルサスとその人口論）は、トマス・カーライルの「陰気な科学（dismal science）」という言葉がマルサスを含む当時の経済学に向けられた批判として後に流布したこともあって、ときに冷酷で非情な経済学の立場を象徴するようにとらえられることが少なくありません。

しかしマルサスの救貧法批判の核心は、スピーナムランド制度（賃金がある水準以下になった場合に救貧税によって賃金補助を行う）が、中小の地主の救貧税負担を増やすばかりか、人口の「予防的制限」や「道徳的制限」（悪徳行為ないし禁欲をともなう結婚の延期）への意欲を消失させ、労働者の勤勉と自立の精神を損なうという点にあります。

リカードウも救貧法は利潤率を引き下げるとともに人口を増加させることによって、逆に貧困を増大させるとみていました。「公正で自由な競争」があれば、経済成長率と労働需要増加率がプラスであるかぎり実質賃金率は生存水準よりも高くなるのに、人為的な介入（救貧法）があればこの原理が攪乱される、と考えたからです。リカードウは次のように言っています。

> 人道の友としてはこう望まざるをえない。すべての国で労働者階級が快適品や享楽品に対する嗜好を持つべきであり、そしてそれらの物を取得しようとする努力が、あらゆる合法的手段によって奨励されるべきであると。過剰人口を防ぐには、これよりもよい保障はない。・・・慎重と深慮を教えて、独立の価値を銘記させることによって、われわれはしだいにより健

全でより健康な状態に近づくであろう。（リカードウ『原理』（全集版）116、125頁）

マルサスとリカードウの貧困と食糧をめぐる議論は、救貧法と穀物法をめぐる議論と重なりあいます。貧困と食糧が相互に関連する問題として捉えられているのです。それには、もともと穀物輸出国だったイギリスが1760年前後から輸入国に転換し、ナポレオン戦争（とくに大陸封鎖）による穀物価格の高騰がイギリス国内の農業投資を活性化させたものの、1813年には大陸からの穀物輸入と豊作によって穀物価格が暴落し、多くの農業労働者が失業するという事態が起きたこと、また議会が1815年の穀物法改正によって穀物価格が低下したときに輸入小麦に高い関税をかけて国内農業（地主階級）を保護しようとした、という歴史的な背景があります。

今日からみれば、ふたりの議論の特徴を次のようにまとめることができるでしょう。第１に、リカードウが生産（供給）に注目したとすれば、マルサスは消費（需要）に着目した。第２に、リカードウが地主と労働者・資本家の利害が対立することを差額地代論で示唆したのに対して、マルサスは工業製品の需要は奢侈品を消費する地主にあるから、もし穀物が自由に輸入され地代収入が減ると、工業製品への需要が減少し農業だけではなく工業でも生産が縮小する、と考えた。第３に、マルサスは完全な貿易の自由の意義を認めつつ、その例外として外国の穀物の輸入制限を主張し、自然災害や戦争の現実という視点から食糧を海外に依存する危険性を指摘して農業の保護と穀物法の擁護を唱えた。

これらのいずれもが、貧困と食糧をめぐるふたりの論争と思索の交差から導きだされた結果なのです。

## ５．おわりに

マルサスとリカードウが生きたのは、博物学や化学、地学、天文学など多様な分野の学問が次々に登場・開花する時代です。新興の学問である経済学もそれらにつらなるひとつの分野でした。リカードウが1817年に『経済学および課税の原理』初版を刊行する１年前の1816年にジェイン・マーセットという女性が『経済学対話』を刊行しています。これは経済学を普通の人たちに理解できるようにすることを目的として書かれました。そのマーセットが1806年に初め

て出版したのが『化学対話』だったのはたんなる偶然ではありません（日本では『ろうそくの科学』の著者として知られるマイケル・ファラデーが製本業兼書店に奉公していたときにマーセットの『化学対話』を読んで科学の道へすすむことを決心したという有名なエピソードがあります)。「経済学」も「化学」と同じように新興の学問のひとつであり、それをわかりやすく解説する対象とされたのです。女性を含む多くの人びとが「科学」に興味と関心を抱く時代だったとも言えます。

マルサスとリカードウの経済学は今から200年も昔の話です。それから多くの時間が過ぎ、時代も社会もかわりました。それらはもはや過去のものであって、歴史に埋もれた思想と理論にすぎないのでしょうか。そうではありません。貧困と格差、暴力と抑圧、環境破壊と道徳的退廃、社会主義と資本主義、政治制度と経済システムといった課題は、300年、200年の前からいまにつながっているからです。現代の社会が抱える貧困、拡大する格差、８億人以上にのぼる世界の飢餓、環境問題、食料自給、自由貿易などは、過去から現在にまでつづく深刻な問題なのです。時代が直面する課題に正面から向きあったマルサスとリカードウのふたりから学ぶことは、今日なお少なくないと言わなければなりません。

とくに、貧困を個人の問題ではなく社会が解決しなければならない問題として捉えていたこと、食糧問題を社会全体の課題とみてそれを経済学の主軸に置いていたこと、このふたつはけっして見逃してはならない視点です。今日の言葉で言い換えれば、貧困をたんなる「自己責任」や「自助努力」の問題とはみていなかったこと、また、人間が生きるうえで欠かせない食べもの（食糧）を経済学の理論のなかに位置づけたこと。これらが今日あまりにも軽視されている現実があるだけに、とくに強調しておきたいと思います。

最後に、ケインズの言葉にあらためて立ち返ってみます。

> アダム・スミスとマルサスとリカードウ！　これら３人の人物には、彼らの精神上の子であるわれわれに、なみなみならぬ情感を呼び起こすなにものかがまつわりついている。マルサスとリカードウは、彼らの精神の相容れない素質にもかかわらず、それに妨げられることなく、終生、平静と親愛とのうちに討論したのである。(『人物評伝』139頁)

ケインズが自らを「彼らの精神上の子」としたこの文章には、スミスとマルサスだけではなくリカードウの名前もあげられています。しかもケインズは、この文章につづけて、ふたりのあいだで「平静と親愛」のもとに行われた論争とその終生かわらぬ友情を示すリカードウの手紙を引用しているのです。この手紙はリカードウが亡くなるわずか10日ほど前に書かれました。これをマルサスがどのように受けとめ、なにを思ったかがわかるような記録は見つかっていません。しかしマルサスも、おそらく同じことを感じていたのではないかと思います。

> 親愛なるマルサス、私の仕事は終わりました。他の論争者と同じように多くの議論を重ねた後にも、私たちはそれぞれ自らの見解を持ち続けています。しかしこれらの議論はけっして私たちの友情を左右するものではありません。たとえあなたが私の見解に同意されたとしても、いま以上にあなたに好意をもつことはないでしょう。(リカードウのマルサス宛て手紙1823年８月31日、『人物評伝』139頁)

ケインズのいう「精神」には、この手紙に記されたようなマルサスとリカードウの稀有な友情と親愛にみちた論争が含まれていることは明らかです。ケインズがマルサス『人口論』初版に与えた評価はきわめて大きなものでした。この評価によってマルサスの復権がはっきりと歴史に刻まれたからです。

> [『人口論』は]思想の進歩に偉大な影響をおよぼしてきた書物にならぶ資格がある。……ロック、ヒューム、スミス、ペイリー、ベンサム、ダーウィン、ミルの名前によって連想させられ、真理への愛と高貴な明快さ、感傷ないし形而上学的思弁にとらわれない散文的健全性、また類まれな公平無私と公共心によって特色づけられる伝統……。マルサスが属するのはこうした仲間なのである。(『人物評伝』117-18頁)

このなかにリカードウの名前はありません。しかしリカードウをこの「仲間」のひとりに加えたとしても、ケインズはそれを拒否しなかったのではないか。そう思えます。ケインズが評価したのは、スミスとマルサスとリカードウの理

論や思想だけではありません。むしろ、その根底にある「真理への愛」「高貴な明快さ」「公平無私と公共心」といった伝統的な「精神」だったと言ってよいように思います。今日の経済学が受け継がなければならないもっとも重要なものは、この精神なのではないでしょうか。

**参考文献**

(1)マルサスとリカードウの主著

1) トマス・ロバート・マルサス『人口論』（初版・永井義雄訳）中公文庫、1973。その他、岩波文庫版や光文社古典新訳文庫版など。
2) トマス・ロバート・マルサス『人口の原理 [第 6 版]』（南亮三郎（監修）・大渕寛・森岡 仁・吉田忠雄・水野朝夫訳）中央大学出版部、1985年。
3) トマス・ロバート・マルサス『経済学原理』上・下（小林時三郎訳）岩波文庫、1968年。
4) Malthus, Thomas Robert. [1803] 1989. *An Essay on the Principle of Population*. In James, Patricia (ed.). *T. R. Malthus: An Essay on the Principles of Population*. Variorum edition, 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press for the Royal Economic Society.
5) Malthus, Thomas Robert. [1820] 1989. *Principles of Political Economy*, 1 st ed. In Pullen, John (ed.). *T. R. Malthus: Principles of Political Economy*. Variorum edition, 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press.
6) デイヴィド・リカードウ『経済学および課税の原理』上・下（羽鳥卓也・吉沢芳樹訳）岩波文庫、1987年。その他、雄松堂出版版など。
7) Ricardo, David. [1817] 1951-73. *On the Principles of Political Economy and Taxation*. In Sraffa, Piero (ed.). with the collaboration of Maurice Dobb, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols. Cambridge: Cambridge University Press.（『デイヴィド・リカードウ全集』全11巻（堀経夫他訳）、雄松堂出版、1969-1999年。

(2)マルサスとリカードウについてもう少し学ぶために

1) ジョン・メイナード・ケインズ『人物評伝（『ケインズ全集』第10巻）』（大野忠男訳）東洋経済新報社、1980年。

2) ドナルド・ウィンチ『マルサス』（久保芳和・橋本比登志訳）日本経済評論社、1992年。

3) ジョン・プレン『マルサスを語る』（橋本比登志・溝川喜一編訳）ミネルヴァ書房、1994年。

4) Patricia James. *Population Malthus: his life and times*. London: Routledge & Kegan Paul, 1979.

5) Sergio Cremaschi. *David Ricardo: an intellectual biography*. London: Routledge, 2022.

6) John Pullen. *The Macroeconomics of Malthus*. New York: Routledge, 2022.

(3)その他

1) Jane Marcet. *Conversations on Political Economy: in which the elements of that science are familiarly explained*. London: Paternoster-Row,1816.

2) Harriet Martineau. *Illustrations of political economy*. London: Charles Fox, Paternoster-Row. 1834.

# マルサス・リカードウの生涯（年表）

| マルサス | | リカードウ |
|---|---|---|
| [アダム・スミス生まれる] | 1723 | |
| | 1726 | [スウィフト『ガリヴァー旅行記』] |
| [スミス『道徳感情論』] | 1759 | |
| サリー州ウェストコットに生まれる | 1766 | |
| | 1772 | ロンドンに生まれる |
| [スミス『国富論』] | 1776 | [アメリカ独立宣言] |
| | 1783 | アムステルダムで数年学ぶ |
| ケンブリッジ大学ジーザスカレッジ | 1784 | |
| | 1786 | 父の仕事（手形・債権売買）に加わる |
| このころ『国富論』を読む | 1789 | [フランス革命] |
| [スミスがエディンバラで病死] | 1790 | |
| ジーザスカレッジのフェロー | 1793 | プリシラ・アン・ウィルキンソンと結婚 |
| 小冊子『危機』執筆・未刊 | 1796 | [ナポレオンのイタリア遠征] |
| | 1797 | [イングランド銀行兌換停止] |
| 匿名『人口論』初版 | 1798 | |
| | 1799 | 妻の実家のあるバースで『国富論』読む |
| 『食糧の高価格』 | 1800 | |
| 実名『人口論』第２版 | 1803 | [ナポレオン戦争はじまる] |
| ハリエット・エッカソルと結婚 | 1804 | |
| 東インド・カレッジ歴史・経済学教授 | 1805 | |
| | 1809 | 「金の価格」『モーニング・クロニクル』 |
| | 1810 | 上の寄稿をまとめた『地金の高い価格』 |
| リカードウとの交友はじまる | 1811 | |
| 『グレンヴィル卿への書簡』 | 1813 | |
| 『穀物法と穀物価格』／国富論編断念 | 1814 | ギャトコム・パーク購入（1976アン王女） |
| 『地代の性質と増進に関する研究』 | 1815 | 『利潤論』[穀物法・ナポレオン戦争終結] |
| [ J.マーセット『経済学対話』] | 1816 | [M・シェリー『フランケンシュタイン』] |
| 『東インド・カレッジに関する声明書』 | 1817 | 『経済学および課税の原理』初版 |
| | 1819 | 『原理』第２版／下院議員 |
| 『経済学原理』初版 | 1820 | |
| [経済学クラブ創設] | 1821 | 『原理』第３版 |
| | 1823 | ロンドンで病死 |
| 『人口論』第６版 | 1826 | |
| 『経済学の諸定義』 | 1827 | |
| 妻の実家があるバースで死去 | 1834 | |
| ジョン・カゼノウヴ編『原理』第２版 | 1836 | |

# アダム・スミスとローダデール

## ―ローダデール伯文庫所蔵の『国富論』初版本をモチーフとして―

安川　隆司
（東京経済大学教授）

## はじめに

東京経済大学の図書館には和洋の貴重書が多数所蔵されています。それらは1900（明治33）年の創立以来、営々と収集に努めてきた先人たちの努力の賜物です。いずれ劣らぬ貴重な資料ですが、中でも異彩を放っているのが、スミスとともに、この講演のテーマになっているローダデールの名を冠した「ローダデール伯文庫」です。

その文庫には、「スミス経済学の最初の本格的批判者」と言われるローダデールが詳細なノート(*)を書き込んだ『国富論』の初版本が含まれています。それはおそらく世界で最も貴重な『国富論』と言っても過言ではないでしょう。本学図書館がスミスの生誕300年を記念する行事を企画した所以の一つはそこにあります。

私の講演では、以下、

１．ローダデールの小伝
２．ローダデール伯文庫について
３．スミスとローダデール
４．展示資料の概説

の順でお話をしたいと思います。

＊本講演ではこのノートを『国富論ノート』と呼ぶことにします。

## １．ローダデール小伝

まず、ローダデールとは何者なのか、簡単にご紹介しておきます。主な典拠は、『国民伝記辞典』と『英国経済学者伝記辞典』の２つです。

ローダデールは本名をジェイムズ・メイトランドと言います。生まれたのは

1759年で、スミスより36歳年下、マルサスより７歳、リカードより13歳年上になります。没年は1839年。当時としては長命でした。父親はスコットランドの名門貴族の第７代ローダデール伯で、彼は次男でしたが、30歳で家督を継いで第８代ローダデール伯となりました。

学歴は、地元のエディンバラ大学に入学し、一時イングランドのオックスフォードで過ごしたのち、最終的にはスミスの母校で、教授も務めたグラスゴー大学を卒業しました。グラスゴーでは、スミスはもう退職した後でしたが、スミスの高弟ジョン・ミラーの指導を受けました。ただし、ミラーは経済学者ではなく、政治学者でした。卒業後は、法曹を志して、ロンドンの法学院の一つであるリンカーンズ・インに進みました。しかし、弁護士や裁判官として活動を始めないうちに、21歳にして早くも庶民院に議席を得て、政治家としてのキャリアを歩むことになりました。1789年に父親が亡くなったために、翌年に家督を継いで貴族になり、活動の場は庶民院から貴族院に移りました。

それはちょうどフランス大革命の時代でした。ローダデールは革命が始まって３年目の1792年に渡仏し、革命の様子を目の当たりにしています。若きローダデールはフランス革命の思想に共鳴し、政治家としてはリベラル派に属しました。しかし、長じて、1821年以後は保守に転じ、工場法や選挙法などの改革立法には反対の立場をとるようになりました。フランス革命とその後の長い対仏戦争の前後で政治的な見解を大きく変えたイギリスの政治家、思想家の例は少なくありません。ローダデールもその一人であるわけですが、具体的な事情は十分に解明されていません。

ローダデールの人となりについて補足しておきますと、どうも短気で荒々しい性格だったようで、議会での論敵などに対して、決闘を申し込んだことがあるということです。しかも、少なくとも２度。幸い、仲裁者のおかげで、流血

の惨事には至りませんでしたが、ローダデールの人望には大きく影響したことと思われます。1806年に植民地インドの総督に推されたことがあったのですが、東インド会社の取締役会に猛反対されたために、断念せざるをえなかったそうです。さもありなむ、と思います。

この荒っぽい性格は、ローダデールの経済学にも影響したように思われます。第３節で具体的に説明しますが、ローダデールは『国富論』に触発されて、批判の書『公富論』を書き、スミス批判で地歩を築きました。1804年の初版出版後、1819年の第２版出版までには、リカードvsマルサスの論争だけでなく、ナポレオン戦争をめぐる戦時経済、終戦後の戦後経済を舞台に華々しい議論の応酬があり、それを通じて経済学は長足の進歩を遂げつつあったのにもかかわらず、２版にはそれに対するリアクションは見られません。２版の扉には“Greatly Enlarged”（大幅増補）と記されていますが、実際は若干加筆してあるだけで、新たな章や節が追加されたわけではありませんし、既存の章や節に新たなアーギュメントが追加されたわけでもありません。ローダデール研究の第一人者、パグリン（あるいはペイグリン）はこの経済学の新展開に対する無視を「尊大さ（arrogance）故」と解釈しています。

## ２．ローダデール伯文庫について

さて、次に、冒頭で触れた本学図書館の至宝「ローダデール伯文庫」について簡単に解説をしておきます。次節の伏線です。

本学が「ローダデール伯文庫」を取得したのは1989年から1991年までの足かけ３年にかけてのことでした。３年間に計６回にわたって購入したことが記録からわかります。ローダデール家が所蔵したコレクションは非常に膨大なものでしたので、一括では買い手がつかないと判断したようで、何回にも分けて古書市場で売りに出されました。冒頭で触れた旧蔵者ローダデールの書き込みがある『国富論』初版本も切り売りされたもので、５回目の購入に際して、単品で購入したという記録が残っています。売りに出されたすべてが把握できているわけではありませんが、経済学文献の主要部分は本学に収められています。また、政治関係の文献については早稲田大学が取得しました。ただし、この両大学の蔵書がすべてであるわけではなく、他にも売りに出されたものがあった

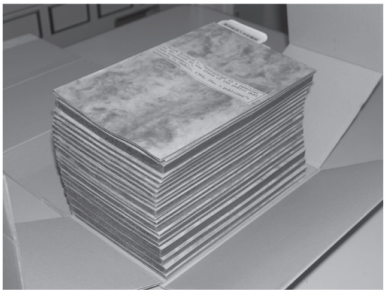
ようですが、詳細はわかりません。（ローダデール文庫には旧蔵者の手書き目録が含まれていますので、本学分と早稲田の分を合わせて、その目録と照合していけば、２大学以外に流れてしまったものがあったとして、その実態が判明するはずです。）

本学所蔵分は、総冊数は202冊、あるいは202巻です。と、説明すると少ないように聞こえますが、少ないのは、この文庫の保存形態が独特で、元の所有者、つまりローダデールが薄い小冊子類を20冊ぐらいずつまとめて合冊製本しているので、物理的には200冊ですが、書誌的には点数は大幅に増えて、3097点に及びます。

ローダデール伯文庫が経済学古典のコレクションとして優れている点は、いくつもあります。主な点を挙げますと、第一に、収集者自身が経済学史上に名をとどめている経済学者であり、旧蔵者の書き込みが豊富に残っていること。第二に、経済学の草創期に収集されたために、最も刊行年が新しい資料でも1820年代という非常に古い時代のものであること、そして第三に、世界的に著名なロンドン大学のゴールドスミス文庫やハーバード大学のクレス文庫にも所蔵されていない稀覯資料を何点も含んでいること、等々です。

年代に関して補足しますと、最も古いものは1534年刊行のロンドン近郊の農村の土地保有に関する文書です。徳川家康も生まれてない時代です。それも含めて16世紀と17世紀の資料だけでも約250点になります。

## 元所有者によるバインディングと現在の保存形態



左の画像の資料よりもさらに厚いものを解体したもの

現在、「ローダデール伯文庫」はデジタル化されて、公開されていますが、このデジタル版の作成に際しては、合冊物はすべて解体して写真撮影しました。束（つか）が厚すぎて、のどが広げられなかったからです。例えて言いますと、厚さ１～２センチぐらいの新書版の本を10冊まとめて縫い合わせて表紙を付けたみたいなもので、判型の割に束が厚い珍妙な形の作りになっていたわけです。90度も開かないことが普通で、非常に読みにくいものでした。ローダデールは製本した後は読まなかったのではないか、と疑ってしまうぐらいです。そういう特殊な製本ですから、費用の問題もあり、撮影後は再製本することなく、１冊１冊特注の紙ケースに収めて保管しています。

ところで、なぜこのような貴重なコレクションが本学の所蔵に帰すことになったのでしょうか？　それは３つの偶然が重なったからだと、私は思っています。

１つは、当たり前ですが、ローダデール・コレクションという経済学の古典時代の大コレクションがたまたま市場に現われたということ。

２つめは、その時、日本がバブルの絶頂期を迎えていたこと、また関連して、貿易黒字の削減を目的として、輸入を強制的に増やす政策を採っていたこと。この当時は、旧文部省から各大学に海外からの購入を増やすように通達が届くということもあったぐらいです。追い風が吹いていたわけです。

３つめは、本学側の事情で、当時、スミス時代のイギリス経済学研究の第一人者の杉山忠平という先生が専任教員としてお務めだったこと。先生は、岩波文庫版の『国富論』の翻訳者でもあり、それ故、ローダデール・コレクションの真価を誰よりも的確に評価できる方でした。また、先生は経済学者であると同時に本の専門家でもありました。私の恩師は杉山先生の後輩だったのですが、杉山先生のことをビブリオグラファー、つまり本の専門家とどこかで書いていました。そのぐらい本の扱いにはお詳しかったということでしょう。加えて、先生は日英両方の一流古書業者と強いつながりをお持ちでした。

このような条件を同時に満たす大学はそう多くはなかったでしょう。もちろん、学内の理解者による支援もありました。本学は1990年に創立90年を迎えましたから、その記念にふさわしいという判断もあったようです。そうした幸運に恵まれて、本学は競争の激しい国際的な古書市場で勝ち残れたという次第です。

今申しましたように、現在、ローダデール伯文庫は図書館の公式サイトで公開され、世界中の誰でもが閲覧できるようになっています。ご来場の皆さまも興味がありましたら、下記のURLから閲覧してみてください。

https://repository.tku.ac.jp/dspace/handle/11150/985

## 3．スミスとローダデール

新村先生と出雲先生のご講演で既におわかりになったと思いますが、近代科学としての経済学は18世紀の第４四半期にアダム・スミスによって創始され、19世紀に入って、リカードやマルサスによって鍛えられ、古典派経済学として発展しました。

リカードとマルサスは親友であると同時に論敵でもあり、マルサスの人口学説をリカードが理論のベースとして共有するということはありましたが、２人はことあるごとに論争をしました。その論争が古典派経済学の発展を促したので、経済学史上の意義は非常に大きなものでした。

この２人とは違って、世代的に異なるために、直接議論の応酬をしたわけではありませんが、スミスとローダデールも、経済学説上、ちょっとリカード対マルサスと似たようなライバル関係にあったと言うことができます。そのことをよく示しているのは２人の経済学上の主著のタイトルです。

スミスの『国富論』は英語では *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*、他方、ローダデールの主著は *An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth*で、多くの場合、『公富論』と訳されています。『公富論』の初版が出版されたのは、1804年で、スミスの没後ですから、このライバル関係はローダデールが一方的に仕掛けた関係ということになりますが。

では、どのような点でローダデールはスミスのライバルであったのでしょうか？

最も大事なスミス批判のポイントは「価値論」に関するものでした。よく知られているように、スミスは、市場における商品の価値の源泉を労働に求めました。そして、価値の尺度は基本的には投下労働量であると説明しました。い

わゆる労働価値説です。これをローダデールは真っ向から批判しています。

まず、スミスですが、価値（交換価値）に関連してこう述べています。

「あらゆる物の真の価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようと欲する人に対して真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。」

これに対し、ローダデールは、冒頭でご紹介した『国富論ノート』では、スミスのこの定式を否定し、その理由として「もしこれを認めるなら、商品の真の価格はそれを獲得しようと欲する人の技量や器用さによって変わってしまうことになる」と記しています。そして、さらに「一商品を獲得しようと欲する人、つまりその買い手にとって、価値はただ一つ、市場価格あるのみである」と自説を書いています。

スミスは市場における平均的な技量を前提にしているのであって、ローダデールのこの理由付けは子供じみた言いがかりのように思えますが、自説の部分は非常に重要なスミス説に対するアンチテーゼになっています。

『公富論』では、このアンチテーゼが詳細に展開されています。

ローダデールはまず価値という語を「商品に内在する性質」ではないと言います。ある特定の条件が物に価値を付与し、商品たらしめるというわけです。その条件は２つあり、一つは「人間の欲望の対象」であること。そしてもう一つは、「ある程度の希少性」を有することです。前者は需要、後者は供給と読み替えるとわかりやすいと思います。これは限界革命の立役者の一人、メンガーの経済財の定義によく似ていて、先進性を感じさせるものです。それはともかく、価値は、物に内在しているわけでも固定的でもなく、変動するものだとして、ローダデールはその変動には４パターンがあると言います。

１．量の減少によって価値は増加する。
２．量の増加によって価値は減少する。
３．需要の増加によって価値は増加する。
４．需要の減少によって価値も減少ずる。

かくて、ローダデールは言います。

「あらゆる物の価値は、それに対する需要とその量との比率に完全に依存しているのであって、いかなる性質を持とうとも、そしてそれが商品にどのような素晴らしさを付与するにせよ、それに対する需要かその量に影響しない限りは、その価値に実質的な変化はもたらしえないのである。」

これは大学1年の経済入門か高校の「政治経済」で習うようなミクロ理論の「いろは」ですが、19世紀初頭の時点でこのような価値論を持論とした経済学者はあまりいませんでした。ローダデール自身は、同じスコットランド出身で、後半生にフランスで活躍したジョン・ローの希少価値説に先駆を見ていたようですが、時代はまったく異なります。あえて類似の考え方をしていた経済学者を挙げるとすれば、スミスの同時代の、これまたスコットランド人のジェイムズ・ステュアートということになるでしょう。何故か、ステュアートのことは『公富論』の中では触れていません。そして、ローダデール伯文庫に所蔵されているステュアートの『経済学原理』の初版本には、『国富論』の初版本とは逆に、ほとんど読んだ形跡がありません。スミスはステュアートを完全に無視したことで知られていますが、そのスミスを批判するローダデールにとって、ステュアートは敵の敵で味方のはずなので、この無視は説明がつきません。

以上からわかるように、ローダデールは価値と価格をほとんど同一視しています。このことは、富の概念にも大いに影響していて、スミスとの違いを際立たせることになります。

ローダデールの定義では、商品が人にとって有用であったり、喜ばしいものであったりするだけでは価値を持ちません。それが価値を持つには、ある程度希少でなければなりません。そうであれば、個人の富（private riches）はそうした希少な物を集めることで増加するでしょう。しかし、とローダデールは言います。「人類の常識は、人間にとって有用だったり必要だったりする商品を希少にすることで国富（wealth of a nation）を増やすという提案は受け容れないであろう。」

スミスは、交換価値と使用価値の間には必ずしも正の相関関係はないということの例証として、水とダイヤモンドの例を挙げています。ローダデールも個

人の富と総体としての国の富が同様の関係にあるとして、水を例に挙げています。

水は人間にとって有用かつ必要であり、それが豊富にあることは国民にとって望ましいことであるに違いありません。しかし、それが豊富に存在する国では、経済上の価値を持ちません。水の量を減らせば、性質は変わらぬままに、希少性が加わりますから、価値が発生することになりますが、果たしてそれは国民にとって望ましいのか、ということです。

ローダデールが『公富論』というタイトルを選んだ理由は、このように私富と公富が正の相関どころか、むしろ負の相関関係にあると考えられることから、「国富」という中立的であいまいな表現は使わずに、個人の富とは明確に区別されるものとしての「集合的な富」を論じることをはっきりさせるためだったわけです。

もう一点、スミスとの関係に戻ってご紹介しておきたいのは、資本と資本蓄積に関する二人の考え方の相違です。

スミスは、節約を貴び、浪費を戒めました。「資本は節約によって増加し、浪費や不始末によって減少する」と考えていました。年々の収入のうち、消費せずに保留したもの、つまり貯蓄がすなわち資本であり、生産的に使われて富を増加する。利子率云々は捨象するとして、これが経済成長です。

『国富論ノート』ではこの短い一文に長いコメントが付されています。

> 「この一節の意味は理解し難い。資本は国富増加の第一の推進力だという彼のお気に入りの仮定に進むのだが、これは疑いもなく誤りである。
> [中略]
> どんな商品も価値なり富の性格なりを獲得するのは消費の状況による他ないし、消費が生み出す需要の程度があらゆる物の価値を決めるので、消費の削減あるいは出費の削減は国富を構成するすべての商品の価値をある程度減じることになる。」

スミスにとっては、資本の増加→雇用の増加→生産の増加→価値増加、つまり国富の増加であったので、資本を増やすための節約が大事で、浪費は忌避されましたが、ローダデールにとっては、需要を一定と仮定した場合、商品の増

加は価値の減少につながってしまうので、優先度は節約ではなく、需要を増やすための消費の方にあったのです。

一方、『公富論』でのスミス批判は、過剰蓄積批判の形をとっています。ローダデールは耕作者を例にして次のように説明しています。

耕作者が農耕生活を送るうえで保有しているのは、①耕作地、②直接・間接の消費のために保留された野菜や家畜などの資材（stock）、及び③労働に代替するための役畜や農機具などの資本（capital）という３種類がある。人間にスミスが想定するような節約性向あるいは蓄積性向なるものがもしあるものと想定するなら、彼は家族が習慣的に消費してきたストックとしての野菜や家畜の一定量を減じて、生産のために使うことによって、資本を増やそうとするであろう。しかし、その資本の増加は必ずしもそれに応じた彼の富の増加をもたらすわけではない。なぜなら、彼の耕作地の規模に応じた資本をすでに有しているならば、倹約してさらなる資本を蓄積することは無意味だからである。

もちろん、これは「耕地の拡張は資本を増したいという欲望を正当化する」という条件を付けての議論なので、ローダデールの意図は節約さえすれば良いというスミスの断定の仕方を批判することにあったということになるでしょう。

希少性を重視したローダデールですが、ローダデール自身、経済学者として希少な存在であったので、20世紀以降の経済学史研究においては、「異端の経済学者」とか「アンチ・リカーディアン」とか、もっと不名誉なことに、「忘れられた経済学者」などの位置付けを与えられています。

「異端」というのは当時の正統派と見なされていたリカードとその追従者たちの学説とは異なる立場を採っていたことを意味しますから、当時のコンテキストにおいては「アンチ・リカーディアン」と近い意味になります。しかし、同義ではありません。「非リカーディアン」即「反リカーディアン」ではないからです、そこで問題になるのはリカード派とローダデールの相違です。

予め答を言うと、違いは「セー法則」をベースにしていたか否かにあるとされてきました。セー法則というのは、フランスの経済学者のジャン・バティスト・セーが『経済学概論』（1803）で定式化した説で、イギリスでは、ジョン・ステュアート・ミルの父のジェイムズ・ミルが窓口になって広めた学説です。簡単に言えば、「供給はそれ自体が需要の原因でもあるので、需要と供給とは自ずと均衡する」というものです。この考え方に立つと、例えば、ナポレオン

戦争のような大戦争の後には戦後不況に陥るということがあるにしても、そうした攪乱要因がなければ、需要不足による不況はありえないということになります。今では信じがたいことですが、19世紀の正統派はこれをベースにしてその上に体系を構築していました。

これに異議を唱えたアンチ・リカーディアンの筆頭がマルサスで、先ほども申しましたように、リカードとの論争は経済学史上最も有名な論争の一つになっています。これが行われたのはナポレオン戦争後の1810年代以降のことでした。他方、『公富論』の初版は1804年の出版ですから、ナポレオン戦争後の恐慌とは無関係ですし、セーの『概論』のわずか１年後なので、セー法則に対する直接のリアクションでもなかったでしょう。

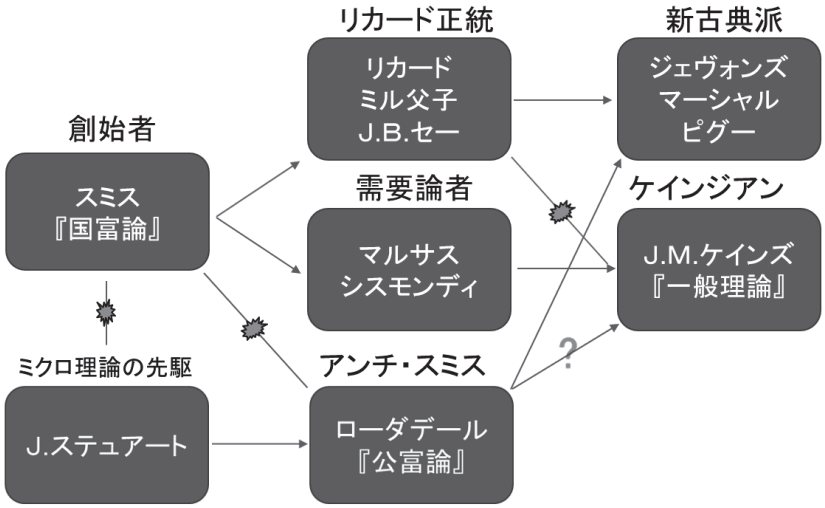
ローダデールは、価値（あるいは価格）は、需要の増減によって変動すると説明しましたが、増減が価値に及ぼす影響は、物の性質によって異なると考えていました。簡単な例で説明すると、主食にしている穀物のような必需品の場合は、価格が上昇しても、なしで済ませるわけにはいきませんから、需要は大きく減ることがないのに対し、奢侈品の場合には、我慢しようと思えばできるので、需要の減り方は大きくなります。これは「需要の弾力性」の違いという概念で説明されますが、ローダデールはこの需要の弾力性に差異があるために、多種多様な商品のそれぞれに対する需要の変動は一様ではなく、それぞれの生産部門間で不均等が生じ、結果的に特定の部門で需要不足と価値の低下が起きてしまうと言うのです。もっとも、需要不足は価値（価格）の低下をもたらすので、そのことによって新たな需要が生まれるとも言っています。ですから、ローダデールの関心は、全般的な需要不足や過剰供給の問題ではなく、むしろ需要構造の変化のメカニズムにあったと見なすべきかもしれません。しかし、需給の自動均衡という発想はまったくなく、また、どちらかと言うと、供給よりも需要側の要因に重点を置いていることから、セー法則に与していないことだけは明らかでしょう。

ローダデールは、（有効）需要論故に、同じくセー法則を奉じたリカーディアンに対して需要論をもって論争を挑んだマルサスと同列に扱われることがあります。よく知られているように、ケインズはマルサスの需要論を発掘して、このケンブリッジの大先輩を自らの理論の先駆者として再評価しましたが、20世紀後半以降、ケインジアンの中からローダデールをもケインジアン的系譜の

中に位置づけようとする研究者が現れました。第１節の「ローダデール小伝」でも参考にしたパグリンは、ローダデールをマルサスとともにケインズの先行者と位置付けました。そして半世紀後に書いた辞典項目の中でもその位置付けを変えずに繰り返しています。

私自身は、確かに、ローダデールは非リカーディアンの需要論者ではあるにしても、マルサスとの共通点をあまり強調しすぎるのは適切ではないと思っています。

マルサスは『経済学原理』の中でローダデールに言及していますが、肯定的な引用ではありません。曰く、富の定義は広過ぎて、一科学の領域を超えている。あるいは、蓄積を収入の一部を資本に転化する以外の方法で行われるという考えには同意できない、などです。もちろん、価値論に関しても、労働価値論の範疇を逸脱していないマルサスと、価値と価格を明確に区別せず、その決定要因を需給関係に一元化するローダデールが相容れないことは言うまでもありません。マルサスはやはりスミスの後継者なのです。もしローダデールを「アンチ」と言うなら、「アンチ・リカーディアン」ではなく、「アンチ・スミス」でしょう。以上を系統図に書くとこうなります。



## ４．記念展示会について

最後に現在図書館内で開催中のアダム・スミス生誕300年記念展示会について簡単にご案内しておきます。

この展示会の趣旨は、生誕300年の節目を迎えて、「経済学の父」スミスの功績を顕彰することですが、スミスの著作だけを並べてもスミスの立ち位置というものがわかりにくいのではないかと思いまして、周辺にも目配りすることとしました。ですから、展示の主役はもちろんスミスの２冊の主著『国富論』と『道徳感情論』ですが、それを取り囲むように、グラスゴー大学時代の恩師ハチスンの『情念論』(1728)、親友ヒュームの『人間本性論』(1739-40)、後継者的立場のリカードとマルサス、それぞれの主著、すなわちリカードの『経済学および課税の原理』(1817)、マルサスの『人口論』(1798) と『経済学原理』(1820)、(ちなみに今年はリカード没後200年でもあります)、そして展示会のもう一人の主役ローダデールの『公富論』(1804) を配置しています。

すべてをご紹介する余裕はありませんが、スミスの２著について少しご説明します。

まず『国富論』ですが、本学図書館には、初版本だけでなく、スミスの生前に出版された第５版までの初期の版がすべて揃っています。初版本は２セット所蔵しています。展示している初版は、ローダデール文庫の中の一書で、すでに説明しましたように、ローダデールのノートが書き込まれているのですが、書き込みを目的とした特別な仕様になっていて、なかなかの異観を呈しています。

＊巻頭カラーページ参照

18世紀の本は質素な厚紙で綴じて販売され、購入者がレザーで製本するのが普通でしたが、ローダデールは製本に際して、白紙のシートをすべてのページの間に挟み込んで、元の倍のページ数にして製本させました。そうした本のことをInterleaved copyと言うそうです。ローダデールは読み始めは欄外に書き込みをしていたのではないかと思います。それでは埒が明かないと思ったか、途中で、腰を据えて『国富論』を読み込んで、書き込みをするつもりになり、そんな特殊な製本をしたようです。

実際、ローダデールは自ら書き込みを行っただけでなく、複数の書記を使って、ノートを書き込んでいます。書き込まれたノートは膨大な量で、見る者を圧倒しますので、ぜひ現物をご覧いただきたいと思います。そのノートは、杉山先生によって大変なご苦労の末に解読され、イギリスの出版社から出版されています。その公刊されたノート、すなわち本講演で『国富論ノート』として言及した資料も、併せて展示しています。

ローダデールがノートを作成した年代は正確には不明ですが、そのノートを土台にして主著の『公富論』を書きあげたことは間違いないと思われます。『公富論』は1804年に出版されましたが、ノートにはその後に書き込んだものもあり、ローダデールがいかに『国富論』の批判的研究に力を注いだかがわかります。先ほど申しましたように、『公富論』も展示していますので、併せてご覧ください。

さて、スミスの哲学上の主著である『道徳感情論』は『国富論』よりも17年早く、1759年に上梓されました。グラスゴー大学の道徳哲学担当教授を務めていた時代です。『道徳感情論』でのスミスは、利己心が人間の活動の原動力であることを認める一方、人間には他者に対する同感（sympathy）を覚えたり、他者からの同感を顧慮したりする傾向があり、公平な観察者（impartial spectator）の是認が得られるように自己を規制する能力を持ちうると、そして、それが社会の調和的秩序を形成している仕組みであると説きました。これは『国富論』における予定調和的な社会観の布石になっており、スミス研究者の中には『道徳感情論』こそスミスの主著であると見なしている人もいるぐらいです。

ローダデールは哲学には関心が無かったのか、『道徳感情論』は「ローダデール伯文庫」には含まれていません。しかし、本学図書館は、スミスの著作は重点的に収集したようで、一般貴重書の中に初版本から著者の生前最終版までがすべて揃っています。そのうちの初版本はスミスが出版者を通じて手配した著者献呈本であることが見返しに書かれた献辞から判明しています。

＊巻頭カラーページ参照

「著者よりシェルバーン卿へ
そして彼から
シャーロット・コルトハースト夫人へ
1759年８月１日」

シェルバーン卿というのは後に首相になった２代シェルバーン伯の父の初代シェルバーン伯で、コルトハースト夫人はその従妹でした。スミスが初代に進呈した献呈本を数カ月で従妹に送ったわけです。これは初代が学問に関心のない無教養人だったからというわけではありません。初代シェルバーンの次男、つまり２代の弟は当時グラスゴー大学に在学中でスミスの指導を受けていました。スミスはチューター的な役目を負っていて、次男の様子を詳しくシェルバーンに書き送っています。また、シェルバーンはコルトハーストにも子弟をグラスゴー大学に進学させるように勧めたようで、スミスはそのことについて別の機会に謝意を表しています。そうしたスミスをめぐる人間模様がこの短い献辞からはうかがえるのです。

スミス以外の資料について簡単に補足しておきます。

ハチスンはグラスゴー大学でのスミスの恩師でした。スミスは後年、「けっして忘れられないハチスン」として懐かしんでいます。ハチスンは、スコットンド啓蒙哲学の祖で、スミスの道徳哲学の先行者でもありました。ヒュームはイギリスのみならず近代最高の哲学者の一人で、経済学に関してもスミスの先行者の一人でした。年齢や業績的にスミスの先輩格で、スミスを遺言執行人に指名しました。リカードとマルサス、そしてローダデールとスミスとの関係は出雲先生のご講演や私の講演の前半部分から、ご理解いただけているかと思います。

展示会はこのホールの北側に隣接する図書館の１階で開催しています。スミス、リカード、マルサス、ローダデールについての講演を聴かれた後で、登場人物たちが残した歴史遺産をぜひご覧になってください。

＊巻頭カラーページ参照

## おわりに

第８代ローダデール伯とその貴重書コレクションを題材に、スミスの生誕

300年を顕彰する講演を構成してみました。話題を提供するために準備をした講演ですが、自分自身にも新たな気付きがありました。

一つは従来のケインジアン的なローダデール解釈に対する疑問です。リカードとマルサスの対抗を視座にしたローダデール解釈は必ずしも妥当ではないと思われるということです。もう一つはステュアートとの関係です。こちらは未開拓のテーマだと思われます。

この両者に対する答は「ローダデール伯文庫」が教えてくれるはずです。そこにこそ、この稀代の古典コレクションの真の価値はあると言っても差し支えないでしょう。

私の講演は以上になります。ご清聴ありがとうございました。

**参考文献**


Leslie Stephen(ed.), *The Dictionary of National Biography*, 1885-91.

Morton Paglin, *Malthus and Lauderdale: the Anti-Ricardian Tradition*, 1961.

東京経済大学『東京経済大学創立90周年記念 図書館所蔵 ローダデール伯文庫目録』1990.

杉山忠平「貴族経済学者とその蔵書/ローダデール文庫をめぐって」『東京経済大学報』1990, 23-4, 8-11

杉山忠平「ローダデイルの経済学説」『東京経大学会誌』1991, 172, 89-104.

安川隆司「ローダーデイルの東インド会社論」『東京経大学会誌』1995, 191, 219-230.

Sugiyama, Chuhei(ed.), *Lauderdale's Notes on Adam Smith's Wealth of Nations*, 1996.

安川隆司「ローダーデイルの穀物法論」永井義雄他編『マルサス理論の歴史的形成』2003, 247-69.

Roger Backhouse, et al., (ed.), *The Biographical Dictionary of British Economists*, 2004.

高梨武臣「ローダデール文庫—東京経済大学図書館所蔵を紐解く」『経済資料研究』2004, 34, 46-56.

安川隆司「ローダーデイル―人と学説」『経済資料研究』2006, 36, 17-31.

以上

東京経済大学　アダム・スミス生誕300年記念講演会　記録集
発行日：2024年３月
発　行：東京経済大学　図書館